**№31　テーマ『人間的魅力とは何か』**

**講話日2006年6月12日**

**芳村：皆さん、こんばんは。**

**一同：こんばんは。**

**芳村：だいぶ暑くなってまいりまして、外でのお仕事は大変だと思います。どうぞ頑張ってください。今日のテーマは、「人間的魅力とは何か」というテーマで、これはプロとして仕事をする場合には、誰もが目標にしなければならない重要な課題です。先ほども久保川社長さん、おっしゃいましたけど、自分の売りはなんなのか。これが俺の魅力だというふうに言うことができるものを何か一つは持ってなければ、プロとして存在感のある仕事というものをやっていくことはできません。そういう意味で、今日は、人間的魅力とは何か。プロというのはどういうふうな、資格、内容というものを自分の中に整えなければならないのか、そういう問題について考えていただきたいと思います。**

**まず第１番目の、この人間的魅力の形成という課題ですけども、人間的魅力というのは、どういうふうにして形成されていくのかということなんですよね。これは、まあ、前回、人格の３条件というものを話させていただきました。これは人間の３条件と、１番、書いてありますけど、本当は人格の３条件なんですけど、人格という言葉に変えておいてください。人間じゃなくて、人格の３条件。人格の３条件というのは、人間が人間としての格を持つ。犬猫ではない。人間としての格を持つためにはどういう条件が必要なのかというのが、人格の３条件ですけど、これは前回、お話をさせていただきましたように、人間が人間の格を持つためには、この不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さと、それから、人間としての成長意欲と、それから、人の役に立つことを喜びとする感性という愛ですね。この謙虚さと成長意欲と愛、これが人間が人間の格というものを、持つための基本条件であります。そういうこの人間の格というものを持つための努力というものを続けておることによって、だんだん、だんだん、人間には人間の格というものが備わってくるわけですけど、そのことによって、人間的魅力というようなものが、だんだんとその人の人間性の内容として出てきます。で、同じ努力をしておっても、やっぱり、それぞれ人によって個性がありますし、また努力の仕方においても、違う時間、空間の中でいろんな体験を積んでいきますので、同じ努力をしておっても、やっぱりその人なりの個性というものが出てきます。その意味で、自然に努力すれば、自分自身の独特の魅力というようなものが出てくることになるわけです。**

**で、一般的に魅力というのはいったいなんなのかといったら、魅力というのは、人を感動させることができる要因です。みんな個性があるわけですから、誰でも、人を感動させることができる要因というものを自分の中につくること。これがプロとして仕事をしていく場合の非常に大事なこの目標になります。人を感動させることができるものというのを持っていなければ、やっぱり仕事においては、抜きん出た成果というものを挙げることはできません。その人間的魅力というのは、この人間が持っておるさまざまな要素の中で、人を感動させることができるものとはいったいなんなのか。それを、考えていくことによって、人間的魅力とはなんなのかということが、わかってくるわけなんですけども、一般的に、そういう人間的魅力というものをですね、全体として表現した場合、人間力という言い方をします。人間力というのは、結局、その人が持っておる力の総合的な表現として、どういう魅力が出てくるかということなので、その人の人間力とはなんなのかということに、なってくるわけなんですよね。一般的に人間力という言葉が、最近、よく遣われるようになってきたんですけども、だけど、具体的にその内容、人間力とはなんなのかということについてあんまりちゃんとした理解を持っていないで、ただこの人間としての魅力というような、そういう意味で人間力という言葉が遣われているんですけど、人間力というものには、具体的に、内的人間力と外的人間力という領域の違いがあります。内的、外的というのは、内外ということなんですけど、内的人間力とはなんなのかといったら、内的人間力というのは、人間であるならば、誰もがその命の内面に秘めておる力ということで、これは人間というのは、理性、感性、肉体という３つの要素からできておりますから、人間には知力と、それから感性に対応する気力と、そして、肉体に対応する体力、理性に対応する知力と、感性に対応する気力と、そして、肉体に対応する体力ですね。この知力、気力、体力というものが、まず内的人間力というもののベースになるものです。それから、この実践的な力としては人間には意志の力と愛の力というものがありますので、内的人間力全体というのは、知力、気力、体力、それから、意志の力、愛の力。これをこの人間が内面において秘めておる人間的魅力になる基本的な要素です。そういうこの内的人間力というものが外の世界、社会に対して表現されたときに出てくるものが、外的人間力という内容のものです。**

**人間が社会的行動をする場合には、自分が持っておるさまざまな内的人間力というものを統合して、そして、それを自分の力としていろんなことをしていきますので、外の世界に対して人間が行動する場合には、自分の内面において持っておる力が統合されて表現されてくる。そういうこの内的人間力が統合されて、社会に向かって表現されるさまざまな人間の力とはいったいなんなのか。これが外的人間力といわれるもので、それは具体的には、政治力、それから経済力、教育力、文化力、軍事力、この５つがですね、外的人間力というふうにいわれるもので、この５つは、人間が社会というものを生き抜いていくために、基本的に持っていなければならない力です。政治力と経済力と教育力と文化力と軍事力ですね。これは外的人間力といわれるもので、この政治力と経済力と教育力と文化力と軍事力、これが、いわゆる社会の中でですね、その人の具体的な魅力として感じられる内容になってくるものですね。これは政治力においても、経済力においても、教育力においても、文化力においても、軍事力においても、これは全部、内的人間力というものが統合的に表現されて出てくるものなんですよね。**

**ですから、われわれが実際に仕事においてプロとして、この社会の現実を生き抜いていこうと思ったら、政治力を磨かなければならない。経済力を磨かなければならない。それから、教育力を磨かなければならない。また、文化力を磨かなければならない。そして、軍事力を磨かなければならない。軍事力というのは、これは国家のレベルで言えば、軍事力なんですけども、個人のレベルで言った場合には、危機対応能力、悪への備えというもので、現実社会というものには悪がいっぱいあります。現実的には、善と悪というのは、人間的現象の半分が悪であって、半分が善である。悪は常にこの半分は、現実に存在するものであって、常に悪への備えという心構えを持っていなければ、人間は現実の厳しい社会を生き抜いていくことはできません。うっかりお人よしになってしまうと、だまされてしまって、とんでもない損害を被り、とんでもない被害を被り、自分がその相手に利用されて、思うがままに動かされてしまって、ばかを見るというようなことがいっぱいあります。もうこれが正直者がばかを見るという世界で、やっぱり悪への備えというものをすることによって、人間は現実を力強く生きていくことができる力というものを、持つことができる。**

**軍事力というのは、国家的にいった場合で、個人のレベルでいった場合には、悪への備え。危機対応能力。これは会社のレベルでも、やっぱり危機対応能力というのはしょっちゅうちゃんと点検して持っていないと、社員を守ることはできませんし、また、外部からのさまざまな悪い影響というものをはねのけてですね、そして、その会社を発展させることはできませんので、そういうこの悪の誘惑、悪の誘い、そういうこの悪い方向性に会社が引きずられていくというか、そういう誘いに乗ってなんかやってしまうということに対する常に警戒心というものは持っていなければこの現実を勝ち抜いていくことはできません。そういう悪への備え、危機対応能力というものが、国家的なレベルでいうと、軍事力ですけど、個人のレベルでいったら、危機対応能力、悪への備え。これも非常に大事な現実を生き抜く力なんですよね。こういうものを全部まとめて、人間力というわけですね。政治力と経済力と教育力と文化力と軍事力、これを全体引っくるめて、人間力というふうにいいます。**

**これは、人間しか持っていないような独特の力というふうな意味で、いわれるわけですけど。政治力というのはですね、基本的には自分の一言で何人が動くか。言葉で人を動かす力が、政治力です。魅力ある言葉を遣う力というものを磨いていかないと、営業はできませんし、やっぱり、この会社の中でも言葉というものを大切にしてですね、誤解されないような、正確な、的確な言葉使いというものを磨いていかないと、仕事の能率が非常に悪いです。誤解されるようなことを言っておったんでは、水掛け論になってしまって、そんなこと言ってないというのに、言ったやないかということで、議論が、かみ合わないということになってきたりなんかしますから、そういう言葉を磨く、この政治力という力が非常に大きな働きを現実的には持っております。単に政治力が言葉だけではありませんけど、魅力ある言葉を遣う力というのは、これは非常に政治力の中核を成すものであって、現実的には、権力というのは、自分の一言で何人が動くかというのが、権力の力、構造であります。**

**経済力というのは、これは金があるということが、経済力があるということじゃなくって、経済力というのはなんなのかといったら、経済システムを熟知しておって、経済システムを使いこなす力、経済システムを支配する力が経済力です。多くの人たちは経済に支配されてしまっておって、経済は資本の論理で動くんだから、その資本の論理を理解しないと、経済社会では勝ち組になれないというようなことで、この資本の論理に支配されてしまってる人が多いんです。だけど、それはこの人間が経済の奴隷になっておる姿であって、本当に人間が自分のつくった、人間がつくった経済というものを人間のためにというか、人間が幸せになるために使っていこうと思ったら、この経済力というのは、経済システムを熟知して、経済システムを使いこなすという経済を支配する力を持たないと、経済力とは言いません。これは株は上がらんともうからんというのは、そういう発想では、これは経済の半分しかわからんという人間で、株とか相場というのは、これはヘッジ機能でできてますので、上がっても下がっても、もうかるというシステムになってますから、だから、上がっても下がっても、もうける力というものを持ってないと、経済力があるというふうには、具体的には言えないわけですよね。経済力というのは、金では俺は困らんぞという、そういうふうな力であります。必要だったら、いつでもできるぞという力が経済力です。**

**教育力というのは、これは子どもを育てるだけじゃなくて、社員教育もあり、また一般的に教育力というのは、自分が多くの人に影響を与えると、どんな影響を与えることができるか。影響力というものが、教育力の、まあ、基本になる力ですね。自分が多くの人に感化を、感化力、感化を与えて、そして、そのいろんな人を成長させていく、そういうこの力が教育力。それから、文化力というのは、これは仕事はできるけれども、その人は、仕事もできるけども、だけど、ギターを弾かしてもなかなかのもんやという、そういう何かしら、カルチャーという、文化的な事柄においても、玄人はだしという、そういう力を持ってることによって、この他人から信頼され、信用され、あるいは親しみを感じられたり、魅力を感じてもらったり、あるいは、この文化力を持つことによって心服、心から服するという、心服というですね、人間関係が生まれてくるという、そういうことになってきます。教育力というものも、これもやっぱり師弟の関係というかたちから、心服、心から服するというね、そういうふうな人間関係をつくっていく大きな働きがありますけど、教育力、文化力というのは、これはなんのためにそれをわれわれは必要とするのか。それは他人から信頼され、信用され、親しみを感じてもらう。そして、心から服する、心のつながりを、つくっていくという、ことのためにですね、文化力というのは非常に大事な力です。**

**これは豊臣秀吉がですね、天下を統一する。その信長が死んで、そして、その秀吉が天下を統一するということになった場合、軍事力と政治力と経済力においては、誰も豊臣秀吉にかなう人間はいないという状況になって、一応、その国は、この統一されて、安定したという状況になったんですけど、だけど、なかなかですね、諸侯が秀吉に心服しない。何かあったらひっくり返したるぞというような、そういう感じの、その不安定な状況が続いておった。そこで、この恒久平和というか、長い平和をつくっていこうと思ったら、やっぱりその心服という、精神的なその信頼度というものを、つくっていく。人間関係における信用、親しみというものをつくっていかないと、平和な安定した社会はできないということで、そのために秀吉が採用したのが茶道という、文化であります。この室町時代末期から武士社会に広がっておった茶道という、心のつながりというものをつくっていく。この文化の力っていうものを秀吉は使って、この安定した社会秩序というものを、つくろうということを、志したわけです。**

**だけど、実際はこの秀吉は千利休を取り立てて、そして、その高い位に就けて、そして、自分は千利休から直接、茶を習ってるんだという姿をですね、諸侯に見せて、そして、その自分の茶道においてはお師匠さんである千利休でも、政治的には自分の膝元にひざまずくという姿を諸侯に見せて、そのことによって、この茶道の世界を統括しておる千利休すら、自分の膝元にひざまずくんだという、そういうひれ伏すんだという姿を見せることによって、この文化的な世界、すなわち茶道という世界を自分が支配する力を持とうとして、そして、そういう計画を立てたんですけど、実際は、秀吉はわび茶というものを千利休に学んだはずであるのに、秀吉がつくった茶室が金ぴかの茶室だったので、諸侯の失笑を買って、結果としては諸侯の信頼を十分に獲得するというような結果がつくれなかったんですけども、だけども、やっぱり、われわれにおいて心しなければならないことはですね、この文化力というものを人間が備えなければですね、人間関係の中に、この本当の信頼、信用、心服という、そういう安定した人間関係はつくれない。どんだけ力があっても、文化力、精神的なこの豊かさというものを持っていない人間はですね、本当の強固な人間関係、本当の安定した人間関係というのをつくることはできない。力の支配を、また力によって覆されるということになってしまいます。その意味で、この仕事をしていく場合に、何かしら、文化的な趣味を持って、その趣味の力でお客さんから何かしら尊敬されたり、あるいは、親しみを持ってもらったり、あるいは信頼してもらったりというね、そういうふうなこの力をつくっていく。これもやっぱり、現実社会を生き抜くためには大事なこの努力の目標になる人間的魅力の内容になるものなんですね。それは文化力ですね。**

**軍事力というのは、これはこの自分の身を守り、家族の身を守り、また会社を守り、社員を守っていくという、そういうことのために悪への備え。そういう悪というものを前提にしながら生きる力というものを常に自分は養っておかなければならない。その意味では、いろいろ武道を習うことも大事かもしれないし、あるいは知恵を磨いてですね、困った、窮地に追い込まれた状況になってしまっても、それから脱却するような、そういうこの悪への備えとしての力を持つことも必要だし、保険ということも考えなきゃならん。損害保険も考えなきゃならん。いろんなこの意味で、悪への備えというものを考えるということも現実的な社会では大事な課題であります。そういうこのことを総合して、外的人間力というんです。**

**まあ、人間力というふうに一言で言っても、それぐらいの非常に幅の広い内容がその中にはあります。特にこの現実を生き抜く力というのをわれわれが持とうと思ったら、外的人間力という魅力をわれわれは自分の力として備えていく努力をしなければならない。もっともっとわれわれは、政治力を磨くという努力をすることが大事でありますし、また経済力を磨き、教育力を磨く。それを業務を通しながら、仕事をしながら、そういう力を自分は磨いていくことを意識しながら、人間関係というものを、さまざまな、社内での人間関係や、社外での人間関係、いろんな人間関係というものを、この体験しながら、その中で自分の政治力というものを磨いていくというような意識を持ってやらないと、なかなか政治力も磨けません。また経済力というものも、単に、その日常の仕事をしてるだけじゃなくって、自分自身、独自に経済社会の勉強をして、本を読んで、そして、いろんな業務を通して、経済界の実態を知って、そして、その経済社会というものの中で、そのシステムを熟知しながら、自分が勝ち抜いていく力というものをつくっていく。これもやっぱり会社の発展に大いなる武器となる能力になってきます。そういう力を持てば、一躍経営陣として、珍重されて、会社の重要な役職を自分が、この預かることができるという、そういうこの出世、立身出世の、力になってきます。**

**教育力というのは、社員の人間の質を高めていくような、そういうことを自分が部下を持ったならば、その部下の人間としての質を成長させていくような、対応の仕方を考えなければならない。人間を育てる力というものが、これは家庭においても、会社においても、いろんな場面で相手を、成長させるという、力というのは、非常にこれは大事なもので、ただ自分がその力を持つだけじゃなくて、そのことによって相手が感謝して、あなたと出会えたので、私はこんな人間になれましたと言って、その人を教えた人間よりも、その人のほうが立派になっちゃったりなんかして、その恩返しで、また自分がいい目を見るようなことにもなってこないとも限らないようなのが教育力であって、学校の先生というのは、一生、小学校、中学校、高等学校の先生で終わっても、自分の教えた子どもが大臣になったり、総理大臣になったり、あるいは文化勲章をもらうような文化人になったりして、その先生のおかげで私は今日こうなりましたと言って、あいさつにやってきたりなんかして、その先生の価値が上がってきたりなんかするようなことも、あったりしますのでね。そういう意味で、教育力というのは単に自分の力だけじゃなくって、人を成長させて、そのことによって相手に喜ばれるという能力ですね。**

**これは、師弟という、独特の人間関係というものをつくり出す。こういうことも、お客さんとの関係でも、また業界の中でも、なんか文化的な力で、その業界全体の質を高めるような、文化的な力を持って、今でも、やっぱり茶道の世界というのは、非常にその職場、職業やそういう組織を超えて大きなつながりを持ってますので、茶道という世界で、教えることができるような立場に立つと、その人の一言で、先生の言うことだからって、みんな動いてくれるということで、非常にその仕事においても、また業界のさまざまな取引関係においても、その人が出てきて、いろんな厄介な問題をばさっと、うまく処理してしまうみたいな、そんなこともできてしまうのが文化力ですね。そんなことも、やっぱり考えていったら、この経済社会で生き抜いていこうと思ったら、文化的な力というのは非常に大きな働きをします。**

**人間的魅力というものの中に、人間力というものがある。人間力というのは、その人が持っておる、この人間的魅力というものを統合的、総合的に表現した言葉が人間力というふうに、まあ、言われるわけです。じゃあ、どうすれば、いったい、自分自身は、この人間的魅力というものを人に感じされることができるような、そういうこの力というものを自分の命の中につくり出すことができるのか。まあ、これはプロであるならば、誰もが目指さなければならない重要な課題です。何を魅力として人に感じてもらうかですね。これはやっぱり、お客さんから好きになってもらうというか、そのお客さんにほれられちゃったりなんかしたらね、これは非常に仕事がしやすいですし、またいろんな問題があっても、やっぱり敵方でも敵ながらあっぱれと言われるような、そういう力を持てば、業界においても非常に大きな力を発揮することができますし、まあ、そういう意味で、どういうこの内容を自分が持つことによって、人間的魅力、人に感動を与えるという、そういうこの仕事の仕方ができるようになるのか、そのことを、考えていく必要があります。**

**人間的魅力というものを体系的に考えると、この人間は理性、感性、肉体という３つの要素からできてますので、その意味で、人間的魅力には、理性的魅力と感性的魅力と肉体的魅力という、３つの魅力の要因があるわけなんですね。そして、理性的魅力というものにもさらに３つの内容があって、理性的魅力とはなんなのかといったら、知識の量と知恵と天分。感性的魅力とはなんなのかといったら、意志の力と愛の力と人間性。それから、肉体的魅力というのは、これは、まあ、言わずと知れた肉体的魅力ですね。プロポーションがいいとか、顔がきれいだとか、そういう外見的な魅力というものがあるわけです。それが、容姿、容姿の魅力というふうに、言うことができるもの。それから、目つき、表情、態度の魅力。目に魅力がある、表情に魅力がある、そういう魅力もある。それから、立ち居振る舞い。行動の美学といって、動きの中に魅力というものを感じさせる、そういうことも、肉体的魅力として大事なことで、これは仕事をしてる姿が魅力的で美しい。仕事をしてるその姿を見て、その人が感動するという、そういう世界が、この立ち居振る舞いという美学であります。**

**で、このように人間には理性的魅力と感性的魅力と肉体的魅力と、３つの要因、３つの人を感動させることができる、そういう領域が３つあって、そして、それぞれに３つずつの具体的な魅力の内容がある。で、全部で３掛ける３が９ですので、このサザンオールスターズと申しましょうか、この『銀河鉄道999』と申しましょうか、３掛ける３が９という、そういうことで、人間が人を感動させることができる要因というのは全部で９つある。この９つの人間的魅力、人を感動させることが要因のどれを俺の魅力にしようかという計画を立ててですね、これを俺の魅力にして仕事をしていこうという自分の成長の目的、目標というものを、こういう体系からつかんで、そして、この自分の個性ある魅力をつくっていく努力をするということが、大事なんです。そのことによって、会社内部でも、この尊敬され、また社外においても、お客さんから尊敬され、まあ、いろんなこの状況の中で、何かしら人に魅力を感じさせるという力を持って、素晴らしい人生が始まるわけです。**

**どういう魅力を自分がこの命において表現しようか。どういう魅力を持った人間になろうか。そういうことを考えながら、話を聞いてもらいたいと思うんですけど、第１番目の理性的魅力というのはいったいどういうもんなのか。これは理性という、そういうフィールド、理性という領域の中で他人を感動させることができる力とはいったいなんなのか。その第１番目は知識の量。やっぱり人並み外れた知識を持っておったら、確かにこれは人を感動させる力というものが、非常にこう強く出てきます。昔、クイズ王決定戦というテレビの番組があってですね、クイズ王決定戦というのは、アナウンサーが問題を出して、ボタンの早押しで答えていくというね、そういうことで勝ち負けを争って、どんどん勝ち抜いていくという、ゲームというか、番組なんですけども、地方予選を勝ち抜いてきて、チャンピオン大会に出てきて、そのチャンピオン大会でも準決勝や決勝に残るような人たちって、ものすごい、とにかくもうあきれ返るほどの知識量を持ってるんです。もう百科事典の大項目を知ってるぐらい、当たり前のことで、その大項目の説明の中に書いてある小さな項目のことまで知っておったりなんかして、なんちゅうことまで知っておるんやというような、そういう感じのね、感動を与える。**

**プロというのは素人、お客さんから見て、やっぱりさすがにプロやなというだけの力というものを知識量や技術力において持っていないと、プロとは言えない。プロというのは、素人を感動させて初めてプロなんですよね。そのプロの力の中に、その自分の専門とする職業における知識量において、その群を抜いた、そういう水準の知識量を持っておるということは、これはプロというものの一種の、資格というか、プロであるならば、客を感動させるだけの、知識量というものを持って、そして、お客さんに接するということが非常に大事な、これも仕事上の大きな力です。**

**だけど、この知識の量というものが、人を感動させることができる力になるためには、１つだけ条件があるんですね。どんだけたくさん知識を持っておってもですね、その知識というものが、単に、この受験のためとか、就職のためとか、そういう理性的な必要性から無理やりに覚えた知識というものは人間的魅力になりません。理性的に、無理やりに覚えた知識というものは、観念で終わってしまうんですね。観念で終わってしまうと、それは固定観念、先入観念となって、その人の意識を縛る。人間は知識に支配されてしまって、そして、その意識の自由が奪われてしまって自由が利かない。たくさん知っておるんだけど、行動が鈍い。これが、昔からよく言われる青白きインテリというんで、知識はたくさん持っておるんだけど、知識に縛られて、応用が利かないので、その行動が、ぎくしゃくするというか、実践力がない。ただ意識が縛られるだけじゃなくて、意識が縛られることによって、行動が縛られてですね、やがては、この精神が不自由な、精神の自由がなくなってしまって、自閉症的になってしまう。そういう精神病的な症状が出てくるということにもなってきます。**

**本当に知識というものが魅力となってくるためには何が大事なのかといったら、命から湧いてくる欲求、欲望、興味、関心、好奇心、認識欲、問題意識、命から湧いてくる問題意識や、認識欲や、興味や、関心や、欲求に基づいて獲得された知識。これが、この命を喜ばせる知識といって、それがこの魅力というかたちになって表現されるんですね。命から湧いてくるものなしに、無理やり理性で、その必要性から、理性の必要性から獲得された知識というのは、これは命を苦しませながら獲得した知識ですので、かえってその知識は命を曇らせ、命から魅力を奪い、その人間の人間性において、何かしら人に不快感を与えるというか、嫌な感じを与える。そういう状況にこうなってしまったりするんですね。だけども、この命から湧いてくる、なんでやろうなというね、そういう疑問が命から湧いてくる。その疑問に対していろいろ調べて、ああ、そうかとわかった知識というのは、この命が喜ぶんですよね。そして、命から湧いてくる問いに答えを与えるもんですから、その答えは命に染み込む。一生忘れない。そういう知識がですね、いわゆる積み重ねとなって、この信じられないような知識量になる。だけど、無理やりに欲求なく、無理やりに覚えた知識というのは、残念ながら、一夜漬けみたいなものであって、ほとんどこう時間が経つにしたがって、忘れてしまうものが多いんですね。これが、観念の次元における知識というのはそういうことになってしまいます。**

**だけど、仕事をしながら覚えた知識、仕事をしながら湧いてきた疑問に対して、自分が調べてわかった知識、これは一生ものですよ。一生忘れない。身に付くわけですね。だから、学校で勉強した知識というのは、ほとんど役に立たないものが多くて、仕事をしながら勉強したものが本当、身に付くんですよ。だから、皆さん方も、もっともっと仕事をしながら、その仕事から出てきたいろんな疑問や問題というものを、乗り越えていくために、学問的な知識を吸収していくというかたちで勉強されたならば、それが長い間の積み重ねで、信じられないような莫大な知識量となって、それが人を感動させるような、そういう仕事の仕方に結び付いてくると思います。とにかく、命から湧いてくるものによって獲得された知識は、命を喜ばせ、命を輝かせる。だけど、理性的な必要性から獲得された知識は命を苦しませる。観念で終わってしまうから、固定観念、先入観念になってしまって、人間は知識に縛られてしまう。そこには魅力は生じない。この違いをよくこの知識という観点からわかっておいてもらいたいと思うんですね。もっともっと、この自分の命から湧いてくる欲求や問題意識に基づいて、その仕事をしながら知識をどんどん獲得していくというね、そういう仕事の仕方や勉強の仕方というものをやってもらいたいと。そうすれば、この自分の命が輝き始めて、そして、単にその知識だけじゃなくって、その命の喜びが、命の輝きとなって、人に魅力を感じさせるというふうな、まあ、そういう人格が生まれてきます。**

**２番目の理性的魅力というのは知恵ですね。知恵というのは、知らんけれども、わかってしまう。できんけども、できてしまうというのが知恵ですね。みんなが困っておって、どうしたらええやろうなと言って、みんなが困ってる状況の中でですね、知恵者というふうに言われる人というのは、みんなが困ってるのに、こうしてみたらどうやとこう言えるわけですよね。それが知恵で、べつに知っとるから言ってるんじゃなくって、知恵として湧いてきたことを、言って、そのことが、その状況を突破していく。そういうふうな答えになってくるわけで、そういうのを知恵がある、知恵者というんですよね。これもやっぱり、非常に人を、感動させる。すごいやつやなと、こう言ってもらえるような力になってきます。**

**じゃあ、実際問題、知恵が命から湧いてくる、知恵者という人になるためにはどういうことをしたらよいのかということなんですけど、今、自分の持ってる力でできることしかしようとしない。今、自分の持ってる力でできんことは、すぐできませんといって諦めてしまうようでは、もう一生、その人は知恵の湧いてくる人間になれません。知恵というのは、今、自分の持ってる顕在能力である理性でいろんなことをやってみて、そして、いろんなことをやってみたんだけど、理性ではどうしようもないと。万策が尽きた。なんともならん。そういう状況に立ったときに、だけどなんとかしたい。だけどなんとかせんとこの場は乗り越えていけない。なんとかしようと思って、さらに頑張ってる。そうすると、知恵が湧いてくるんですよ。そういう構造で知恵者っていう、そういうこの魅力ある能力が出てくるわけですね。今、自分の持ってる力でなんともならん状況になって、そこで諦めないで、だけどなんとかしたいと思って頑張ってると、今、自分の持ってる力ではなんともならんのだから、だから、命に潜在する能力があったら出てくるという、そういう構造で知恵は出てきます。**

**実際問題、人間の命には、莫大なその知恵の元となる潜在能力が隠されておるんです。まあ、これはヒトゲノムの研究なんかで明らかになってきてることですけども、この人間には生まれながらに潜在能力というものが、たくさん与えられております。潜在能力というのはどこに潜在してるのかといったら、染色体の中に潜在する遺伝子が潜在能力なんですよ。だけど、まだ人類は、生まれながらに母なる宇宙から、この命に与えられた潜在能力の約１割強しか使っていない。アインシュタインレベルでも３割弱だ。普通の人間は、持って生まれた潜在能力の約１割強しか使わないで生きてるという、まだそういう幼い段階に人類はあるわけなんですよね。だから、まだ８割強も、自分の命には潜在能力という、持ってるんだけど、まだ出てきていない能力というのは８割強もあるんですよ。自分が今、使っている能力というのは、本当に１割ちょっとなんですよ。だから、いくらでも人間はこの知恵者という、そういうこの努力の仕方によっては、いくらでも命から、わからんけどわかってしまう、できんけどできてしまうという力がいくらでも湧いてくる可能性があるんだということを、われわれは忘れてはなりません。**

**だけども、この潜在する能力が出てくるためには非常に努力をしなければならない。その努力の仕方というのがですね、今、自分の持ってる力でどうしようもなくなったところで諦めたらいかんと。そこからが勝負やということですね。今、自分の持ってる力でなんともならんとなったときに諦めないで、なんとかしたいと思って頑張ってると、そうすると、潜在能力が湧いてくるわけですよ。だけど、多くの人は、今、自分の持ってる力でなんともならんと、もう俺の力ではなんともならんと思って、ついつい誰かに助けてもらおうと思って、依頼心や依存心が生まれてくる。依頼心や依存心が生まれてきて、誰かになんとかしてもらおうと思ったら、もう自分の底力は湧いてこないんですよね。いわゆる火事場のばか力というのは、誰にも助けてもらえん、俺がなんとかせんないかんというところから、信じられないような力が湧いてくるというのが、火事場のばか力です。その１つが、まあ、潜在能力の顕現、知恵、気付きという、そういう命から湧いてくる力ですよ。知恵、気付き、潜在能力。この命から湧いてくる力こそ、まさに本当に俺の力で、俺の命から湧いてきた力だから、それこそまさに本当の俺の力なんですよ。**

**だけど、一般的に理性というのは、近代人は理性能力を成長させることに非常な努力をしてきましたので、理性というのはすごい力やと、理性能力で優れていないと駄目やと思ってるかもしれませんけどですね。理性能力というのはいったいなんなのかといったら、理性能力というのは、その大半が、他人がつくった知識や技術を学習して覚えて、それをいかにも自分の力のごとく使ってしまっているという、そういう水準の力が理性なんですよ。だから、理性能力は、言ってみればパクリなんですね。他人がつくったのをパクっちゃったりなんかして、それで、パクったものを俺の力やと誤解して使ってしまってるような水準の力が理性なんですよ。理性能力というのは、結局は過去の知識であり、過去の技術なんですよね。だから、本当にこの新しい次元の問題には理性で対応できません。本当にこの新しい状況というか、そういうこの一回きりの、歴史的に一回きりという、そういうこの新しい状況に対応しようと思ったら、過去のものでは対応できないので、どうしても知恵の力というものが要求されてくるわけです。**

**知恵の力こそ、まさに俺の力から、俺の命から出てきたものだから、知恵と気付きと潜在能力こそ、まさに本当に俺の力なんだ。だから、本当に俺の力で生きるという人生を生きていこうと思ったら、われわれは理性能力でなんともならん状況になったときに諦めたらいかんと。そこから頑張って、だけど、なんとかせんないかん。だけど、なんとかしたいと思ってると、本当の俺の底力、本当に自分の命から湧いてくる力が出てきて、そこから俺の人生が始まる。俺の力で生きる人生はそこから始まるんだ。理性で生きてる分には、この他人の力を借りて、生きてるような次元で、本当の俺の人生じゃないと。この違いを、よくわきまえてですね、そして、教えられたことではない、新たなる状況に対して、自分の知恵の力で解決して乗り越えていくという、そういうたくましい仕事の仕方というものを、ぜひこのプロとして持ってもらいたいと思います。そういう意味で、知恵が湧いてくるという、そういう構造を命に備えた人間になるためには、知力の限界に挑戦する。限界への挑戦という生き方が大事なんですよね。学校で習ってきた知識をこの学歴といってひけらかしてるようでは、あまりにも軽いというか、浅いというか、情けないことであって、本当のその人の力というのは命から湧いてくるものだ。命から湧いてくる力ができて初めてその人の力で生きるという人生が始まる。そこからその人の本当の個性ある人生が始まるということになってくるわけですね。これが、この知恵者という、知恵という能力で生きる人間の素晴らしさです。天分ですね。**

**天分というのは、これは能力の個性ということなんですけど、この潜在能力というのは、全人類に、生まれながらに与えられておる、そういうこの遺伝子ですから、その意味では全人類共通なんですけども、人間には天分という、個性のある能力というものが、存在します。これはどういうことなのかといったら、人類は、だいたい３万個の遺伝子を持っておるというふうにいわれておりまして、その意味では、潜在能力の量においては、全人類、全部共通です。だけども、能力の個性というのはいったいなんなのかといったら、３万個の遺伝子一個一個が、質の違いがあるんですよ。この遺伝子は他人よりも自分のほうが優れている。この遺伝子は自分よりもあの人のほうが優れておるという、そういう遺伝子の質というものがあるんですよ。量においては、人類に生まれてくれば、みんなだいたい３万個の遺伝子を持って生まれてくるんですけど、一個一個の遺伝子に質の違いがある。そこから天分という、俺にしかできんという、そういうこの個性ある能力というのが出てくるんですね。この天分というのは、なんでそういう個性ある能力というのが人間には備わるのかといったら、この遺伝子そのものができるときというのは、これは進化によって新しい遺伝子ができてきますので、だから、進化というのは、種の単位で、種の単位で進化しますから、自分一人だけ進化して、あとの人間は進化せんというんじゃなくって、人類というのは、サル類から人類が生まれるときは、類として、そのサルから独立して、そして、その新しい種が生まれてくるという、そういう構造でこう進化してきますので、進化というのは類の単位で進化するんですけども、だけども、命というのは個の連続性でつながってるんです。**

**遺伝子そのものは、進化によって、この積み重ねられて増えていくんですけども、だけど、命そのものは個の連続性でつながってる。自分には自分のお父さん、お母さんがいて、自分のお父さん、お母さんには、またそのお父さん、お母さんがいて、ずっと系統をたどっていったら、自分のおじいちゃんは、あの森の、あの木の、あの枝で遊んでおった、あのサルから進化したおじいちゃん。そのサルは、もっと昔に、その森の中の、あの池の、あの辺でけんかして遊んでおった、あの恐竜から進化したサルやと。その恐竜は、もっと昔に、その家の中の岩の上でゲロゲロ鳴いておった、あのカエルから進化した恐竜や。そのカエルさんは、もっと昔に、その池のほとりの土の中でごそごそ、あの辺で動いてた、あのミミズから進化したカエルさんや。そのミミズさんは、もっと昔に池の中のあの辺で泳いでおった、あの単細胞生物から進化したミミズさんやとなってきて、命というのは、もう最初の一歩の単細胞生物から、個の連続性でつながってるんですよ。命というのは、そういう存在の仕方しかできないんですね。だから、命は皆、個性なんですよ。**

**なんで人類、みんな顔が違うのか。それも最初の一歩の単細胞生物から、個の連続性で命がつながってきてるから、全部、顔が違うんですよ。みんな同じ人間なんやから、同じ顔をしておってもよさそうやないかと、こう思うかもしれませんけど、そんなことではややこしいですもんね。あっちから歩いてくるやつが俺と同じ顔をしておったら、おまえ、誰や。俺、誰やとなってきて、全然、見分けが付かなくなってしまって、困っちゃうなということになりますから、そういうこともない。全部、顔が違う。全人類、全部、顔が違うんだ。全人類、全部、命は個の連続性でつながってるんです。それが顔が違うっちゅうことの基本原理です。顔が違うということはどういうことなのかといったら、顔のかたちを決めてるのは遺伝なんですよ。遺伝子によって顔のかたちが決まるんですよ。そして、遺伝子というのは、能力が物質化したもんなんですね。遺伝子は、能力が物質化したもんなんだ。能力が物質化した遺伝子によって顔のかたちが決まって、顔のかたちは全人類、全部違う。ということはどういうことなのかといったら、顔が違うっちゅうことは、俺には俺にしかない能力がある。顔が違うということは、俺はほかの人間はできない何かができる。俺独特の能力が俺にはあるんだ。そのことを証明してくれてるのが顔なんですよ。**

**だから、天分のツボにはまる人生というものを生きたならば、本当にオンリーワン、独特の素晴らしい、他人にはまねができない素晴らしい生き方ができる。独特の人生というものを、生きることができる。そういうことになってくるわけです。将棋なら、羽生とか、野球ならイチローとかといわれるような、ああいうこの人たちというのは、まさに天分のツボにはまった人生なんですよ。持って生まれたその天分という、個性ある能力というものを引き出すことによって、ほかの人間にはまねができないという、そういうレベルの力を持ってしまった。そういう人たちが、その業界において、ダントツの輝きを持って、活躍するわけです。だけど、それは羽生やイチローだけじゃない。全部の人間に天分があるわけですよ。その天分さえ出てきたなら、みんな、独特のオンリーワンの人生、俺にしかできんという仕事をして生きることができるんですよ。**

**じゃあ、どうすれば、俺が世界一になり、俺がオンリーワンの命の輝きを持って、人生を生きることができるのか。その天分の発見方法というのがあるわけですよ。天分の発見方法というのはどういう方法なのかといったらですね、５つの方法があって、自分が世界一になることができる能力と分野を特定することができる。どういうことかといったらですね、５つの方法があって、第１番目は、やってみたら好きになるかどうか。やってみて好きにならんことをやったらいかん。やってみて好きになったら、やらないかん。まあ、会社に就職する場合でも、やっぱり、その自分の好きな仕事に就かないと、能力は出てきませんし、また、好きなことをせんと、成功はできません。最初から嫌いなことをやっておって成功するはずはないんですよ。最初は好きなことから始めんといかんのですよ。それが好きこそものの上手なれという、そういうこの昔から言われてることわざの原理です。まずは好きなことをやらないかん。好きっということは天分がある。やってみても好きにならんと、天分はないんですよ。なぜやってみるということが大事なのかといったら、この遺伝子というのは物質ですから、肉体の一部分なんですよ。だから、野球を見とって好きでも、天分には関係ないんですよ。野球をやってみて好きになったら天分はあるけど、やってみて好きにならんかったら天分はないんですよ。見とって好きでは、天分に関係ないんですよ。やってみて好きになったら天分がある。やってみて嫌いになったら天分はない。遺伝子は物質であって、肉体の一部。肉体を動かさないと、天分があるかどうかはわからないんですよ。まずは、やってみて好きになることをやるんですよ。**

**だけどどんなに、やってみて好きになることをやっておっても、今、自分の持ってる力には限界がありますから、どっかで苦しくなるんですよ。苦しくなると最初は好きやったんやけど、やっぱり嫌いになっちゃったといって、やめちゃったりしちゃったりしてしまう人が出てくるわけです。これは、好きなことをやり始めて、その大きな壁にぶつかって、もう駄目や、もうこれは嫌やと思うというのは、これはこのなんちゅうか、ほんちゅうか、冷やし中華ね、この好きなことをやって、壁にぶつかって、そのなんか俺に向いてないんじゃないかというのは、これは楽がしたいというか、安逸をむさぼるというか、やすきに流れるというか、苦労を避けるという間違った行為であって、好きなんだから、その問題をさらに乗り越えていくということをしないと、潜在する天分という能力は出てこないんですよね。今は自分の持ってる力でなんともならんという状況になって、嫌いになっちゃったから、諦めるっちゅうことをしておったんでは、永久に潜在する能力、天分は出てこないんですよ。潜在能力も、天分も、両方ともこれは染色体の中に存在する遺伝子ですから、理性能力がその限界に到達して、そして、なんともならんという状況になったときに諦めないで、なんとかしたいと思って頑張ってると、天分は出てくる。潜在能力が出てくる。天分の出てき方も、潜在能力の出てき方も、原理は同じなんですよ。**

**だけど、その天分と潜在能力、普通の知恵とかいうものと、どこが違うのかといったら、その天分の場合には好きなことをやってるということなんですけど、このいわゆる知恵とか、気付きとかというのは、好き嫌いに関係ない。とにかくは、今、自分の持ってる力でなんともならなくなったときに、だけど、なんとかしたいと思って頑張ってると、そうすると、潜在能力というのはいっぱい与えられてるので、そこから知恵や気付きというものが潜在能力の顕現というかたちで出てくる。だけど、天分というのは、そのさまざまに自分の持ってる潜在能力の中でも、特に優れてる能力というものをどう引き出すかというんでね、そのときに天分というものを、考えなければならない。それが好きなことをやってて、そして、その大きな壁にぶつかったときにやめたらいかん。そこでさらに頑張ってると、そうすると天分が出てきてですね、そして、個性ある能力が自分の、まあ、この命を輝かせてくれる。**

**で、天分のあるところというのは、他人よりも少ない努力でぐんぐん伸びるんですよ。天分のないところというのは、天分がなかったら、どんだけ頑張っても、人類の平均を超えません。平均といっても、ある程度、幅があるんですけどもね、だけど、この天分のないところはどんだけ努力して、どんだけ頑張ってもね、平均まではきますけど、平均は超えないですよ。だけど、天分のあるところというのは、他人よりも少ない努力でぐんぐん伸びるんですよ。そういうところで頑張らないと、人生はあっという間に終わってしまいますからね。そういうところで頑張らないと、能率が悪いです。能力というのは、どんな会社に入っても、その能力を表現する場所はあるんですよ。だから、その会社の中には、さまざまな仕事の領域が存在しますから、だから、自分の能力に最も合った場所に配置転換してもらって、そして、そのところで自分の力を発揮したいという要望を出したらいいんですよ。とにかく天分というのは、みんなにあるんですよ。顔が違うということがそれを証明してるんですよ。天分のツボにはまったら、どんな人でもみんな笑いが止まらんほどの素晴らしい人生になってくる。他人から一目置かれて、本当にこう尊敬されて、本当に楽しい人生が始まるんですよ。**

**その天分の発見方法の第１番目が、やってみたら好きになるかどうか。第２番目はですね、やってみたら、興味、関心が湧いてくるかどうか。３番目は、やってみたら、得手、得意と思えるかどうか。４番目は、他人と一緒にやったら、いつも自分のほうがよくできてしまうかどうか。何回か負けることがあったり、何回か劣ってることがあったら、もうこれは俺よりこのことにおいては優れた能力を持ってるやつがおるんやから、これはもう他人に任せとこうと。俺はほかのことをやろうと思わないかん。何回やっても、誰とやっても、自分がよくできてしまう、勝ってしまう。これはもうやらないかんということですね。最後の５番目は、真剣に取り組んだら、問題意識が湧いてくるかどうか。どんなに真剣に取り組んでも、なんの問題意識も湧いてこない。ただ言われてることを、言われてるままにやってるだけだ。これじゃ、天分はないんですよ。天分があったら、人に言われてやってるという状況から、ここのところはこうしたほうがもっといいんやないかな、ここのところはなんか納得できひんな、ここのところは違うんやないかな、そういうこの反発心というか、問題意識が湧いてくるわけですよ。問題意識が出てくるということはどういうことなのかといったら、俺が出てきたんですよ。すなわち、そこには君独特の何かできるものがあるぞということを、命が教えてくれてるんですね。**

**なんでこれが、天分の発見方法だと言うことができるのかといったら、世の中で成功した人は、好きなことをやって成功したか、あるいは、興味、関心のあることをやって成功したか、得意なことで頑張ったか、人よりもよくできてしまうところでもっと努力をしたか、問題意識に人生を懸けたか。この５つしか成功パターンはないんですよ。この成功パターンと天分の発見方法とが、がっちりぴったり、一致してる。だから、これはすごい原理なんですよ。いわゆる現実の実践において証明された原理なんですよ。だから、これは確かなんだ。必ずそうなるんだ。これは部下を成長させるためにも、自分の子どもを成長させて、立派な人間にするためにも、また自分自身が、この自分自身の命を輝かせるためにも、これはどうしても考えなきゃならん重大なこれからの課題です。これからは個性の時代ですから、みんな個性を持ってて、その個性の中でも、現実を他人から一目置かれて生きていくという、この人生の力を獲得しようと思ったら、天分を発揮する以外にないんですよ。**

**だけど、天分というのは、出てこなければ無きに等しいんですから、どうしたら出てくるのか。それは潜在能力と一緒で、今、自分の持ってる理性能力でなんともならんという状況に立ち入ったときに、そこでやめたらいかん。そこで諦めたらいかん。だけど、なんとかしたいと思って頑張ってると、天分は出てくる。だけど、今、自分の持ってる力でなんともならん。だけど、なんとかしたいというその努力は、非常に苦しい、つらい。だから、みんなそのつらさを避けて、逃げてしまうんですよ。だけど、原理的には、問題、苦しみ、悩みというのは、自分を成長させるために出てくる。問題、苦しみがなかったならば、人間は成長しない。問題、苦しみ、悩みのない人間は、他人に言われて、他人の命令で動くしかないんだ。他人に与えられたことをする以外にないんだ。教えられたことしかしないんだ。それが理性的な、人間のタイプですよ。理性的になればなるほど、個性がなくなるんですから、自分らしい仕事はできなくなるんですよ。**

**理性というのは、他人がつくった知識や技術を覚えたものですから、学歴の高い人というのは、命令されたらなんでもするけど、自分自身は何していいかわからんという人が多いんですよ。だから、もう一生、人に仕えっぱなしで終わってしまうんですよ。だけど、この命から潜在能力が湧いてくる。命から天分が湧いてくるという構造を持った人間だけが、他人に言われなくっても、自分で何か工夫してやっていってしまう。そして、他人が言うたことより、もっと素晴らしいことをしてしまう。そして、その独特の個性あるですね、仕事の仕方や人生を生きることができる。まあ、そういう魅力を発揮するわけですね。これは天分というものです。とにかく理性というフィールドの中には、この知識の量と知恵と天分という、この３つの力が、人間、人を感動させることができる要因として存在します。で、この知恵も天分も、感性という世界から湧いてくるものなんですけど、出てくれば理性能力になってきますので、理性というフィールドの中のこの一つというふうに、言うことができるわけですね。**

**具体的に仕事において使う能力というのは、こういう知識の量と知恵と天分、３つのものがいろんな状況の中で必要となってきます。その意味で、ぜひこの知識の量においてもね、さすがにプロですねと、こう言ってもらえるだけの知識量というものを自分がつくっていかないと、またそういう技術の水準というのをつくっていかないと、プロではないし、また堂々と消費者から金は取れんという、そういうことをよく考えてみてもらいたいと。他人からさすがと言われないような、素人からさすがと言われないような、客からさすがと言われないような力で金を取ろうということはおこがましい話やと。やっぱりプロである限りは、客からさすがですねと言ってもらえる力を自分が持って初めて、客は快く金を出してくれる。客に金の出し惜しみをさせるようじゃ、プロじゃないと。こんだけのことをしてくれたんや。これぐらいの金は当たり前やなと思わせないと、プロではない。それが感動を与えながら仕事をする、感動の仕事というものの値打ちであります。プロというのは、やっぱりそれを最低レベルの目標として、自分の力というものを磨いていかなければなりません。**

**また、プロであればこそ、普通の人では気が付かないようなことに気が付くという、そういうこの気付きや知恵が湧いてくるという、そういうふうなこの力を持って初めて人を感動させることができる。やっぱりプロやという評価をですね、お客さんに持ってもらえる。お客さんがどうしていいかわからんという、そういう状況で困っておったときに、ここのところはこうしてみたらどうでしょうと、ぱっとこう言ってあげて、うまくいっちゃったというような、そういうことであれば、そういう知恵がやっぱり、そのお客さんを感動させて、そして、その人が信頼されるという、そういう状況で、また新しい客を紹介してもらったりなんかして、どんどん、どんどん、その人は業績を、成績を上げていくという、まあ、そういうことにもつながっていきます。いろんなやっぱり建築現場なんかでも、いろんな新しい問題、予想だにもしない、いろんな問題がどんどん出てくるわけですよね。**

**そういう状況になった場合には、自分が知ってる知識では対応できない場合が多いですよ。そういうときに、こうしてみたらどうだろうという知恵が湧いてくる人間と、全然湧いてこない人間と、全然この仕事の水準が違いますからね。そういう意味で、知恵が湧いてくるという構造を持った人間でなければ、新しい事態に対応して、問題を乗り越えていって、そして、その人を感動させるという、そういう仕事はできません。さらに天分というのは、本当にこれはほかの人間にはできない、俺にしかできんという力なので、これはもう誰が見ても、本当にこう感動せざるを得ないような水準の、そういう技量というか、能力になってきます。これは先ほども申し上げた５つの方法でね、自分の天分のツボをこう模索していくんですよ。好きだということよりも、問題意識が湧いてくるということのほうが強烈であったならば、好きなことをやめといて、問題意識に人生を懸けるというね、そういうこの選択をしなければならない。**

**多くの場合、好きでもあり、興味もあり、得意でもあり、この問題意識も湧いてくるというような、そういうもういろんな５つの要因が重なった状況で、天分というものに自分が気が付くという、そういう場合が多いですよ。どの程度の天分があるかは、どの程度、好きなのか、どの程度の興味が湧いてくるのかということによって、その人の天分の水準は決まりますけど、だけど、好きなことをやり始めたら、やっておるあいだに、どんどんめっちゃ好きになっちゃったという、どんどんこう、好きさが増してくるというね、そういうこともあるので、まずはその好きなこと、興味のあることという、そういうこの判断で、事はまず取っ掛かり、やり始めなければならないんですよね。好きだということよりも、問題意識が湧いてくるということのほうが強烈であったならば、好きなことはやめておいて、問題意識のほうに自分のこの努力というか、重点を移していく。まあ、そういう仕方で天分のツボというものをシフトしながら、模索していって、これやというのをつかむわけですよ。まあ、これが能力において、自分をつかむ、自分を発見するという、そういうこの自己実現の方法です。**

**プロというのは、そういうものを目標にしなければならない。とにかくは、人を感動させることができる知識量。仕事をしながらですね、なんでやろうな、どうしたらええやろうな。で、調べて、ああ、そうかとわかったという、そういう仕方で、どんどん、どんどん、知識を積み重ねていくというのが、一生、忘れん、どんどん積み重ねで増えていくという知識のつくり方ですからね。プロは知識の量において、ダントツでなければならない。また知恵が湧いてくるという仕事の仕方というものをしていかなければならない。でないとプロじゃないんだと。そして、これが俺の仕事の仕方や、これが俺流や、これが俺のスタイルやという、そういう仕事の仕方を自分がつかんで、いわゆる野茂ならハリケーン投法とか、そういうふうなこう、独特のこれが俺やという、もので人を感動させるという、そういう能力をね、発揮する。それが天分ですよね。そういう数字をね、ぜひ、仕事を通してつかんでもらいたいと思うんですよね。実際に肉体を動かさないと、そういう能力、潜在するものは出てきませんので、仕事をしながら自分を伸ばしていく、仕事を通して自分を成長させていくという、そういう成長意欲を持って、頑張ってもらいたいと。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、後半のお話に入ります。次は第３番目の項目ですけど、感性的魅力とは何かですね。感性の世界というのは、これは理屈ではない、命から湧いてくるという、そういう世界ですけど、この感性のフィールドの中で人を感動させることができる要因というのは、意志の力と、愛の力と、人間性という、３つの要因ですね。意志の力によって人を感動させる。意志の力が人を感動させるというのはどういうことなのかといったら、これは不撓不屈の意志という力であります。不撓不屈の意志というのは、どんな困難でも乗り越えていくぞ、結果が出るまでやめないというね、どんだけ失敗しても、失敗しても、失敗しても、失敗しても、とにかくやり続ける。どうしても、必ず結果を出す。まあ、そういうこの結果が出るまでやめないという、そういう仕事の仕方、そういう生き様というのが、この意志の力によって人を感動させる方法論ですね。**

**意志の力とはなんなのか。この意志の強い人というのは、いったいどういう人なのかということなんですけど、これまでの哲学においては、意志の強い人というのは、理性的な人だとこう言われておった。すなわち、意志の強い人というのは、自分のしたいことは我慢して、そして、しなければならないことが最後までちゃんとできるという、そういう状態を意志の強いというふうに言っておった。すなわち、意志の強い人というのは我慢できる人だ。我慢できない人は駄目な人であって、我慢できる人が立派な人だというのは、これまでの倫理観というか、人間に対する評価の仕方だったんですね。だけども、何かを我慢して、何かをやるというふうな、まあ、そういうこの意志の強さ、力というのは、これは何か我慢しなければならないものが片方にあるだけ、もうすでにその意志の力には限界があるというふうに、言わなければならない。**

**しかも、何かを我慢して何かをするということは、命にとっては苦しい努力なんですよね。だけど、本当にこの不撓不屈の意志というのは、どんな困難でも乗り越えていくというふうな、そういう力なんだから、どんな困難でも乗り越えていくというふうな、そういう意志の強さ、力というのは、理屈抜きのところにその根拠を持っていないといけない。理屈によって作為的に、人為的につくり出されるような意志の強さというものは、やっぱり作為的であり、人為的であるが故に、限界があり、弱い。本当に強い意志の力、本当にどんな困難でも乗り越えていくという、そういう意志の力というものの根底には、その理屈抜きの根拠がないといかん。じゃあ、意志の強さにおける理屈抜きの根拠とはなんなのか。それは、命から理屈抜きに湧いてくる欲求の強さ、欲望の強さ、興味、関心、好奇心の強さ。命から理屈抜きに湧いてくるものがあって、初めてわれわれはですね、どんな困難でも理屈抜きに乗り越えていくという、力を持つことができるんですね。**

**ということは、意志の強い人間というのは、実は欲求の強い人間なんだ。欲求の強い人間しか成功はできません。成功した人は、欲求の強い人間、欲望の強い人間。興味、関心、好奇心の強い人間。幸福意欲、認識欲の強い人間。欲の強い人間しか、人生においては成功はできません。なぜかといったら、命から湧いてくるものがなかったら、人間は行動をやめるんですよ。命から湧いてくるものに限りおいて、人間は行動し続けるんですよ。命から湧いてくるものがなくなってしまったら、人間は行動をやめてしまう。それが命の自然な姿だ。命から湧いてくるものがなくなってしまった人間が何かしようと思ったら、自分の理性で自分の肉体にむちを打って、無理やりに自分の肉体を動かさなければならない。つらい、苦しい人生だ。だけど、命から湧いてくる欲求があって行動する人間には喜びがある、命の喜びがある、楽しい、生きがいがある、自由と開放感がある。だけど、命から湧いてくるものなく、命から湧いてくるものがなくなって何かをしようと思ったら、理性で無理やりに自分の肉体を動かさないかん。これはつらい、苦しい、堅苦しい、窮屈な人生になってしまいます。**

**まず意志の強い人間とは、欲求の強い人間である。命から湧いてくる欲求の強さと大きさが、その人間の成長の限界であって、人間は求めたところまでしかいかないです。欲求の水準までしか人間は伸びないんですよ。命から湧いてくる欲求の強さと大きさが、その人間の成長の限界であり、その人間の能力の限界なんですよ。欲求以上の能力は伸びないんですよ。求めた以上のことはできないんですよ。その意味で、基本的には、命からふつふつと、抑えがたき欲求が湧き上がってくるという、そういう状態の自分というものを、われわれはつくる。またそういう状態を維持するという、そういう生き方をせんといかん。死ぬまでしたいことがあってしょうがないと。こうなりたい、こうしたい。そういう命から湧いてくるものが収まらないという人生を生きて初めて素晴らしい、喜びのある、楽しい人生になるんですよ。**

**命から湧いてくるものがなくなってしまったら、青年でも年寄りみたいなもんだ。命から湧いてくるものがなくなってしまったら、命は燃えないですよ。理性では燃えられませんからね。燃えなければ楽しくないですよ。欲求のない人間は楽しくないですよ。何がしたいのと言われて、いや、べつに大して何もしたいことはありません。これじゃ、楽しい人生なんて生きようがないですからね。やっぱり、命から湧いてくるものあってこその人生、感じてこそ人生。感じなきゃ燃えませんからね。命から湧いてくるものがあってこその人生。命から湧いてくるものあって楽しい、感じてこそ楽しい、燃えてこそ人生。それで、まず意志の力が人を感動させるというね、そういう力をね、自分が持とうと思ったら、まずは欲求の強い人にならないかん。欲求、欲望、興味、関心、好奇心、命から抑え難きものが湧いてくる。こうなりたい、こうしたいという、そういう欲求が止まらないという、この命というものをつくっていく必要がある。**

**現在、そういう命から湧いてくるものがないとすれば、どうしたら命から湧いてくるものが止まらないという状況になることができるのか。そのためには、われわれは、人間の心というのは、意味と価値を感じる感性だということを、まずちゃんと押さえなければならない。人間の心は意味と価値を感じる感性だ。意味を感じないと、やる気にならん。価値や素晴らしさを感じないと、命に火が付かない。燃えてこない。だから、命から湧いてくるものをつくろうと思ったら、まず今、自分のやってる仕事の意味や、価値や、値打ちや、素晴らしさというものを理性を使って考えるんですね。理性を手段能力に使って、今、自分のやってる仕事や、いろんな物事の意味や、価値や、値打ちや、素晴らしさを考える。理性がその意味を考えると、理性が考えた意味を感じる感性が、だんだん、だんだん、成長してくる。感性が感じたとき、命に火が付くんですよ。感性がその意味を感じれば、興味、関心が湧いてくる。興味、関心が湧いてくれば、それを求める気持ちが湧いてきて、欲求が湧いてくる。そういうふうにして、だんだん、だんだん、命に火が付き始める。本当にこれはすごい、素晴らしいなと思ったら、人間というのは最終的に、もう俺はこのために生きて、このために死ねたら本望だ。まあ、そういうふうな死んでもいいというような、そういう思いにまでいってしまう。**

**恋愛でも、一番燃えたときというのは、もう俺はこいつのためやったらなんでもしたる、もう俺は、こいつのためやったら死んでもいいというのは、一番、恋愛でも燃えたときですからね。燃えたら、人間は死んでもいいという、そういう気持ちまで高まっていく。そのとき、命は最も美しくも激しく輝くんですね。燃えるという状態にならないと、命は輝かない。燃えるためには、このためになら俺は死ねるという、そういうものを持たないと、命は燃えない。どんな仕事でも、他に置き換え難い、素晴らしい価値がある。その仕事の醍醐味をつかんだならば、人間はどんな仕事でも、俺はこのために生きて死ねたら本望だ。もうほかは全然、考えんでいい。もうこれでいいんだという、そういう腹が決まります。どんな仕事でも、それだけの素晴らしさというものをみんな持っておるんですよ。それに気付いたとき、本当のプロだ。プロというのは、その仕事の本当の醍醐味をつかんだ人間、感じた人間がプロなんですよね。**

**まだ俺はこの仕事のために生きて死ねたら本望だという気持ちになってないということは、まだその人の命は不完全燃焼というか、半端な段階で、まだその仕事の本当の素晴らしさ、醍醐味、値打ちというものが、まだ感じられていない。だから、燃え切らないんですよね。なんかくすぶった状態で、なんかこう行動力もあまり激しいものが湧いてこない。だけど、本当にその素晴らしさを感じたならば、われわれは、やめとけと言われても、やってしまうぐらいの、もうどうにも止まらないって、リンダ状態になっちゃったりなんかしてね、突っ走ってしまうという、そういう状態にこうなってしまいます。人間の心は意味と価値を感じる感性だ。意味を感じないと、やる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと、命は燃えない。もっともっと意味や価値について考えるという力を成長させていかないと、より深い意味、より高度な価値、そういうものについて考えていかないと命は燃えてきませんよ。欲求が湧いてきません。ただ知識や情報や事実を知っておっただけでは燃えられませんよ。それは理性ですからね。理性では燃えられません。感じないと燃えません。意味や素晴らしさを感じないと燃えません。**

**とにかく基本的に、意志の強い人間というのは、欲求の強い人間、欲望の強い人間なんだ。だけども、欲求、欲望だけでは野獣なんですよ。人間ではない。意志というのは、その欲求というものが、その核になってるんですけど、だけど、意志は欲求ではないんだ。欲求が意志にまで成長するためには、そこに理性というものが関わってこなければ、意志という、この人間的な力は生まれてきません。意志とはなんなのかといったら、命から湧いてくる欲求をどういうふうな方法で実現したらいいのかを理性で考えるんですね。自分の命から湧いてくる欲求をできるだけ人に迷惑を掛けん方法で、できたら人に喜んでもらえる方法で、人の役に立つ方法で、どうしたら俺のこの欲求を最後まで、納得できるところまで俺は実現し尽くすことができるだろうか。そのことを理性で考えるんですよ。そして、理性で考えて、よし、この方法でやってみようと思ったとき、意志が決まるわけですね。それを決断というんですよ、決断。決断によって意志は決まるわけですよ。決断して意志が決まったとき、その生き様から感動が生まれてくるんですよ。だから、意志の力が人に感動を与えるためには、決断とはなんなのかということをちゃんと知る必要がある。**

**決断とはなんなのか。決断するということは、こうもできる、ああもできる、そうもできる、どうもできる。いろいろな方法論がある。その方法論の中のこれでいこうと決めただけでは、まだ決断じゃないんです。それは決めただけですから、決断の決だけなんだ。決断というのは何を絶つかですよ。何を断ち切るのか。それがちゃんとできてなければ、感動の人生は生まれてきません。決断するということは、多くの可能性の中からあるものを取ったならば、他のものへの思いを断ち切る、逃げ道をふさぐ、退路を断つ。俺にはもうこれっきゃないんだという、そういう腹構えができたとき、それを決断というんです。結婚も就職も、人生において大事な道を決めるときは、この決断が大事なんですよ。決めただけで、断という、断つことをしないと、人生は迷いに陥ります。平凡な人生で終わってしまうんですよ。断ち切ることができなければ。**

**結婚でも、選んだだけで、断と、断ち切ることをしないで結婚生活をし始めると、必ず人間は不完全ですから、問題と悩みは出てきます。そのとき、どうなるかといったら、人間であるならば、だいたい問題が出てくると、こいつと結婚したからこんな問題が出てきたんやと。ひょっとして、あちらの人と結婚しておったら、こんなことにはならなかったかもしれない。これが迷いなんですよ。誰と結婚してもね、自分自身が不完全なんですから、誰と結婚しても必ず自分が不完全なるが故の問題だけ出てくる、悩みだけ出てくるんですよ。問題と悩みの出てこない結婚はないし、問題と悩みの出てこない人生はないし、問題と悩みのない会社はない。犯罪と事故のない社会はないんですよ。どんなにうまくやっても、必ず人間は不完全だからね、常に問題と悩みは出てくるんですよ。**

**だけども、理性的に事実を考えるとですね、その問題が出てくるということは間違ってるんだ。上手に道を選択したならば問題の出てこない道があるはずなんだ。だから、問題が出てくるということは、俺は失敗したなと。こいつと結婚したから、こんなことになってしまった。ひょっとして、あちらの人と結婚しておったら、もっと楽しい、幸せな、楽な人生になったのに。これは理性故の迷い。理性は人間に完全性を求めますからね。これが決めただけで、断をしなかった人間の人生なんですよ。だから、平凡で終わってしまうんですよ。結婚でも、本当の幸せと、本当の仕事における成功を勝ち取りたいならば、断つことを覚えなければならない。選び取って、その次に断つことをしなければ成功はない。幸せはないんですよ。本当の幸せと本当の成功を手に入れることができないのは、断ち切ることを忘れてしまってるからですよ。あるものを取ったならば、そのとき自分が選び取らなかったものの中に、どんなに捨てがたい、素晴らしいものがあっても、あるものを取ったならば、他のものへの思いを断ち切る。もう俺にはこいつしかおらん。もう俺にはこの道しかないんだ。そういう思いが定まったとき、その人は本当の幸せと人生の成功を手に入れたようなもんなんですよ。**

**もう俺にはこいつしかない。もう俺にはこの道しかないんだ。もうあとはこの道しかないんだから、どんな問題が出てこようと、出てくる問題をばかになって、しらみつぶしに乗り越えていくしか、俺の人生はないんだ。そう思ったとき、その人間には確実に成功への道が始まるんですよ。本当の幸せへの道が始まるんだ。もう迷わんと。俺はこいつでいいんやと。もうこいつ以外に、俺の人生を共に歩む人間はいない。ほかの道は考えない。どんな問題が出てこようと、俺に任せとけ。俺がなんとかしたる。心配すんな。誰の責任やと、そんなややこしいことは言わない。とにかく俺の選んだ道なんだ。どんな問題が出てこようと、俺の力で乗り越えていく。他人には頼らん。だから、どんどん、どんどん、潜在能力が出てきますしね。また、問題をどんどん乗り越えていきますから、それが成功の人生なんですよ。成功した人は問題を乗り越えた人なんですから、失敗した人は問題を乗り越えられなかった人なんですから。絶対、おまえを離さんと。おまえしかおらん。おまえでええんやっていう、そういう決め方でいったならば、どんな問題が出てこようと、とにかく俺がなんとかしたる。心配すんなと。それが成功する人間のタイプなんですよ。**

**どんな問題が出てこようと、今度はどうしようか。成功するまで、いい結果が出るまでやめないんですから、必ず成功するんですよ。失敗した人は、失敗するごとにだんだん自信がなくなっていって、そして、途中でやめてしまう。それが失敗する人間のタイプなんだ。成功する人間は、どれだけ、何回も失敗しても、何遍失敗しても、何遍失敗しても、いい結果が出るまで、今度はどうしよう、今度はどうしようでやめない。だから、成長する。だから、成功するんですよ。これはもう本当に成功と幸せの人生への王道なんです。結果が出るまでやめなければ、必ず結果は出るんですよ。問題には必ず答えがあるんですから。答えのない問題はないんですよ。**

**人生は、わずか500万円もの借金でも、首をつって死んでしまうやつがおるんですよ。だけど、500億円の借金でも返してしまう人間がおるんだ。どこが違うのか。問題というのは、みんな苦しいですよ。だけど、苦しいという思いよりも、このままでくたばってなるものかという思いのほうが強くなってきたら、500億円でも返してしまうんですよ。だけど、このままでくたばってなるものかと思うよりも、つらい、苦しいという気持ちのほうが多くなったら、もうその問題は乗り越えられない、絶対に。とにかく結果が出るまでやめない。そういうこの強い思いが、人生を成功に導きます。とにかくいい結果が出るまで、結果が出るまで、絶対、どんなことがあってもやり続けるという、そういう人がお客さんから信頼と信用を獲得して伸びるんですよ。そのために意志の力という、この不撓不屈の意志というものが人生の成功の基本原理ですよ。**

**決断するということは、あるものを取ったならば、そのとき自分が選び取らなかったものの中にどんなに素晴らしい捨てがたいものがあっても、あるものを取ったならば、他のものへの思いを断ち切る。俺にはこれしかない。俺にはこの道しかない。俺にはこいつしかおらん。それが決断ということですね。その決断ができたとき、その人の人生には成功が始まります。確実に成功への一本道を歩み始めることになるんですよ。それが成功する人間のタイプですよ。何遍失敗しても、今度はどうしようか、今度はどうしようか。だんだん、だんだん、いい方向、だんだん、だんだん、いい方法に、このシフトしていって、そして、最後に成功体験をつかむ。その積み重ねが、成功と幸せを自分の手に入れる方法なんですから。それが人を感動させる人生なんですよ。これが意志の力が人を感動させるという原理です。感動は決断から生まれてくるんだ。欲望、欲求だけでは感動は生まれてこない。それは野獣だからね。人間的な感動が生まれてくるのは決断なんだ。あるものを取って、他のものを捨てる。この捨てる勇気が人に感動を与える人生を生きさせてくれるんですね。**

**次、愛の力ですね。愛の力が人を感動させる。人間は深い愛に感動する。愛というのは、基本的には他者中心的な心の働きを愛というんですよね。他者中心的な心の働きを愛という。愛の実践というのは、思いやりと心遣い。思いやりということは、相手の心を思いやって、相手の苦しみをわが苦しみとして感じる。相手の悲しみをわが悲しみとして感じるという、そういうところにこの相手の悲しみというものを自分も感じて涙を流す、そういうこの共感同苦、共感同悲という、そういうこの愛の表現がこう出てくるわけですけど、相手の悲しみをわが悲しみとして感じる。これは思いやりなんですよ。共感同苦、共感同悲。思いやって、そして、相手の悲しみを、そうだよな、つらいよな、そうだよな、悲しいよなといって、相手の悲しみに涙を流す。なんとかしてあげたい。そこから心遣いが始まるわけ。どうしてあげたらいいだろう。そこから理性を使うんですよ。思いやりが根底にあって、相手の悲しみをわが悲しみとして感じ取ったとき、どんなにつらいだろう、どんなに悲しいだろう。そういうふうにこう自分が感じることができる。なんとかしてあげたい。そこで理性を使って、どうしてあげようかというのが、この心遣いですよね。**

**心遣いというのは、心遣いと書きますけど、実は理性を使ってるんですよ。人間の心というのは、理性だけでは心じゃないし、感性だけでは心ではない。心は感じるもんだから、その中核になるものは感性で、その本質は感性なんですけども、だけど、心遣いというのは理性を使うんですよ。感性と理性を使わないと、人間的というものは生まれてきません。感性だけでは人間じゃないし、理性だけでは人間じゃない。理性と感性が絡み合って人間的という世界が生まれてくる。心遣いというのは、理性を使って相手のためにどうしてあげたらいいだろうと考える。それが心遣いなんですよ。心遣いは理性を使わないとできないんですよ。先ほどから社長さんがですね、皆さん方にいろいろご注意なさってますけど、あれもやっぱり、相手の悲しみ、相手の命の状態、相手の気持ちを思いやってですね、その思いやるということをして、そして、みんなのことを考えて、そして、多分、寒いんじゃないか、多分、暑いんじゃないかって、いろんなことを自分が感じ取ってですよ、さあ、どうしてあげようかというんで、心遣いをするわけですよね。それは理性でいろいろ考えてするわけなんですよ。理性と感性を協力させないと、人間的という世界は生まれてこない。まずは思いやりが大事なんだ。相手の苦しみを、わが苦しみとして感じるという力がなかったら、みんなが寒いんやないかな、暑いんやないかな。そういうふうなね、共感という、そういう感性は育ちません。**

**感性がなかったら、他人が暑かろうが、寒かろうが、俺には関係ないと。そういうふうな感じになってしまいますからね。自分が設定した温度で、俺はやるべきことをやってるんやと。みんなが寒かろうと、暑かろうと、俺には関係ない。それは全然、心、思いやりという感性がないんですよね。理性でやってる仕事ですよね。だけど、感性があったならば、心があったならば、思いやりがあったならば、みんなどうやろうなと、こう思うわけですよね。それがこのお客さんに対応するときでも、一番大事なその基本的な関わり方ですよね。相手がどうだろうなとこう思いやる、思い量る。相手の気持ちを察するというね。これは恋愛のときでもそうですよ、やっぱり。そういう気持ちがないと、愛の押し付けになってしまって、かえって嫌がられてしまう。思いやりがあって、それから心遣いをする。心遣いは理性でするんですよ。理性を使わないと、心遣いはできませんよ。どうしたら、相手が納得してくれるだろう。どうしたら、相手は気持ちいいだろう。理性を使っていろいろ考えて創意工夫するんですよね。それが心遣いです。それが愛なんですよ。**

**ということは、愛のこの実践的な原理は努力なんですよね。愛の実践的原理は努力なんだ。相手のために努力する気持ちがなくなってしまったら、もうその人の相手への愛はなくなったんだ。相手に対して努力する気持ちがある限り、愛は存在する。相手に対してどの程度の努力ができるかによって、その人に対してどの程度の愛を持ってるかが決まるわけですね。愛の実践的原理は努力だ。相手のために努力する気持ちがなくなってしまったら、もう愛はうせたんだ、なくなったんだ。その人のためにどれだけの努力ができるか。その人のためにどの程度の努力ができるか。そのことによって、どの程度の愛を相手に対して持っておるかはわかるわけですよ。これが愛の実践的原理だ。そして、愛の感動というのはどこから生まれてくるか。愛の感動はどこから生まれてくるかといったら、相手のために自己犠牲的努力を払って、相手のために自己犠牲的努力を払って、しかも、その自己犠牲を恩着せがましく自己犠牲してやったというふうに思うんじゃなくって、相手のために自己犠牲的努力を払いながら、その相手に対して払った自己犠牲的努力を自分が喜びとして感じるときに愛なんですね。相手のために犠牲になってやったという、そういう恩着せがましいことを言ってるようじゃ、愛はない。それは理性だ。だけど、相手のために必死になって苦しい思いをして努力しながらも、それを自分が喜びとして感じたとき、そこに愛がある。そういう状態のときにですね、われわれは感動して涙を流したりするわけですよね。**

**よく組織ではですね、部下のためなら死ねるという上司のもとにしか、上司のためになら死ねるぜという、そういう部下は育たないというんですけど、そういうこの強い絆というものを、つくっていこうと思ったら、人間関係の基本は愛ですから、何かしら自分のしたいことは我慢して、相手のために尽くすという、その努力。だけど、それが自分のしたいことを我慢してというんじゃなくって、どうしてもこの人にこうなってもらいたい。どうしてもこの人にこうしてあげたいというですね、その気持ちから喜びを持って、その自分のしたいことを我慢というか、それをやめといて、相手のために何か努力をする。それが自分にとってうれしい、喜びだという状況になってる場面を客観的に見ると感動するんですよね。病気見舞いでも、時間があったから病気見舞いに行くんじゃなくって、大事な仕事を断って、その人の病気見舞いに行く。だけど、病気見舞いに行ったときに、大事な仕事を断って来たんやと言わない。だけど、あとから人づてに、あの人は大事な仕事を断って、何十万円か、何百万円か損をしたのに、それにもかかわらず、君の病気見舞いにやってきたんやということをあとから聞いて、そんなに自分のことを大事に思ってくれたのと思って感涙の涙を流すというね、そういう状態になってきちゃったりなんかすることもあるのでね。そういうこの愛の感動というのは、相手のために自己犠牲的努力を払いながらも、その努力を喜びと感じる。そこにこの感動を呼び起こす愛の極致がこうあるわけですよね。**

**愛の実践的原理は努力だ。この愛というのは、努力するもんじゃなくって、自然になんかこうするもんだと思ってしまってる人も多いと思うんですけど、自然になんかするというのは、これはまだ恋の段階であって、本当の愛という、この恋の段階、恋というこの本能的なものを超えて、人間が努力してつくっていく愛の美学の世界というのは、これはまさに努力の世界なんですよね。だけど、その努力が、自分にとって喜びと感じるところに愛があるので、努力したんだと思っとる分には、これはまだ恩着せがましい、そういう状況なんですよね。本当の愛ではない。本当に愛があったならば、よくアッシー君だとか、メッシー君だとか、申しますけど、本当にその相手が好きやとなったら、メッシー君でも、アッシー君でも、とにかくは、相手がにこっとしてくれたらうれしいという感じになってですね、めちゃめちゃ相手のために自己犠牲的努力を払ってるんですけど、それが自分が幸せだと思ってるんですからね。そういう状態が、まあ、愛なんですよね。努力が愛だ。相手のために役に立つことがうれしいという、そういうこの状況であります。まあ、これが組織においては、部下のためなら死ねるぜ、部下のためなら、一肌でも、二肌でも脱ぐという、そういう上司のもとで初めて、上司のためなら、一肌でも、二肌でも脱ごうというね、部下が育ってくるという、組織における人間関係としての愛の関わり方というのは、そういうふうにして生まれてくるわけですよね。そういう感動の組織、感動の職場というのは、そういう深い愛の力によってつくり出されてくるわけですね。**

**次、３番目は人間性ですね、人間性。人間性において感動を与える。なんて素晴らしい人間なんだろうという感動というものをお客さんに、同僚に、人に感じさせる。で、人間性というのはどういうものか。人間性というのは、これはこの性格と人格の絡み合いで成り立ってるのが人間性なんですよ。人間には性格という個性もありますけど、人格という、自分が努力してつくっていく人間の格というものもあって、人間にはこの性格という格と、人格という格があって、その絡み合いで人間性という人間独特の世界というのが生まれてきます。あの人は人間性が悪いという、そういうことを言う場合には、だいたい性格が悪いという意味で、人間性が悪いというようにこう言われてるんですけども、人間性というのは、単に性格だけではなくって、人格というものが大きくその人間性には関わってるんですよね。**

**性格というのはなんなのか。性格というのは、こんな性格になろうと思ってなった人間はいないので、気が付いたら、こういう性格になっちゃってたという、そういうもんで、性格は自分ではつくれません。性格はなってしまうもんで、自分ではつくれないし、自分では性格は変えられません。人間性は変わるんですけどね、人間性は変わるんですけど、性格は変わらないですよ。これも非常に誤解されるところで、性格は変えられるんだという人もおるんですけどね。だけど、本当は性格は変わらない。人間性は変わるんですよ。なんで性格は変わらないのか。性格は自分ではつくれないからですよ。しかも、性格の50％は遺伝なんですよ。単細胞生物の段階から人間にまで、進化するプロセスにおいて命に積み重ねられていったものが性格として出てくるという構造になってますので、性格の50％は遺伝で決まるんですよ。単細胞生物から人間にまで進化するまでに命に積み重ねられてきたものが、肉体的に表現されれば、手相とか、顔の相とか、へその相とか、足の裏の相とか、相になるんですよ。**

**だけど、その命に積み重ねられてきたものが精神的に表現されると性格になるんですよ。命に積み重ねられてきた遺伝的なものが、肉体的に表現されたら手相になって、精神的に表現されたら性格になる。だから、手相を見たら性格がわかっちゃうんですよ。足の裏の相とか、へその相を見れば、性格がわかるんです。その相というものと性格はリンクしてますから、だから、易学が成り立つんですよ。手相でも、自分では変えられません。だけど、それは50％、遺伝で決まる性格、遺伝で決まる手相は50％なんだ。あとの50％は、生まれてからのちに無意識のあいだに自分の命に積み重ねられていくのがまた手相を変えてしまうし、足の裏の相も変え、へその相も変える、眼相も変える。それに従って性格も変わるんですけど、だけど、自分では変えられないんですよ。無自覚的、無意識的に自分の命に積み重ねられていったものが、この相になって出てきたり、性格に出てきたりするんで、無自覚的に積み重ねられていきますから、自分でわからない。だけど、その顔の相も40歳になったら、自分の顔に責任を持てとかって言われるように、ある程度は、ある程度は遺伝で決まってるんだ。基本的には遺伝で決まるんだけど、そのあとの自分の努力によって、顔の相も違って、ちょっとは違ってきたりね。**

**手相も変わります。だから、同じ易者さんに、毎年、毎年、ちゃんと手相を見てもらったら、もうその人の人生は全部わかってしまう。もうこうなっちゃうって。いわゆる方向性、傾向性は必ず出てきますからね。だから、近未来はちゃんとわかってる。あんまり先のことはね、不安定ですけどね。だけど、だいたいもう先のことはいろいろ見えてくるんですね。だから、易学が成り立つんだ。それは変えられない。自分で変えようと思っても変えられない。あとはそうなっちゃうということを知って、じゃあ、どう対応しようかという、そういうこの理性で考えることはできるんだけどね。だけど、相は自分では変えられないんですよ。そういう手相に出てくるものが、性格となって表現されてくる。だから、性格は変わらない。で、性格というものにはですね、プラス面とマイナス面がありますから、性格の持ってるプラス面が出てくると、好かれるんですよ。また性格の持ってるマイナス面が出てくると、嫌われてしまうんですよ。**

**だから、フーテンの寅さんとか、『釣りバカ日誌』のハマちゃんなんていうのは、その寅さんやハマちゃんが持ってるいい面が出てくると好かれるんですけど、悪い面が出てくるとみんなに迷惑を掛けて嫌われちゃったりなんかすることもあって、非常にその意味では、性格だけでは不安定なんですよね。だけど、性格というもののいい面が出てくると、そうすると、このなんか、そばにいてくれるだけでいい、黙っておいてもいいんだよという、そんな感じになっちゃったりなんかして、非常にこの好かれるような、そういう性格もあるんですけど。だけども、性格には必ずマイナス面がありますから、また嫌われてしまうという、両面があるんですよね。そこで大事なのは人格を磨くという努力なんですよ。人格を磨いていくと、この性格の持ってるマイナス面があんまり出てこないようになってきて、性格の持ってるプラス面がどんどん出てくるもんですから、人間性が成長するんですよ。で、好かれるようになってくるんですよ。また人格を磨くと、性格の偏りが修正されたり、性格のゆがみが修整されたりしますので、その意味で、この人格を磨くと、この性格に幅ができてきて、いろんな性格と自分を合わせるという、いわゆる、波長が合うという、そういうこの状態が多くなってきて、いろんな人と仲よくやっていけるという、そういう状態になるのが人格を磨くという効果なんですね。**

**じゃあ、人格を磨くっちゅうことはどうすることなのかといったら、人格というものには、高さ、深さ、大きさという３つの次元があります。そこで人格の高さを求め、人格の深さを求め、人格の大きさを求めていくという、そういうこの努力をすると性格のいい面がどんどん出てきて、悪い面が出てこないっちゅうことになってきますし、また、人格の高さが人を感動させる、人格の深さが人を感動させる、人格の大きさが人を感動させる。この人格が持っておる高さ、深さ、大きさというこの３つが、また人格そのものの魅力なんですよね。人を感動させることができる要因なんだ。なんて深いことを言うやつや。なんて度量が大きいんや。なんて素晴らしい、なんて高貴なる精神だ。そういうこの高さ、深さ、大きさということを感じさせることによって、この人間性が輝いてきて、そして、人を感動させるという状況が生まれてきます。人格の高さも感じるものだし、人格の深さも感じるもんだし、人格の大きさも感じるもんなんですよ。だから、これは感性の、領域の魅力なんですね。感じる世界ですからね。**

**まあ、そういう意味でプロというふうに、呼ばれる人たちは、やっぱり人格を磨いて、人格の高さ、人格の深さ、人格の大きさというのを磨いて、そして、このお客さんを、また取引先の人を感動させて、そして、その仕事がうまくいくという、そういう状態の自分を、つくっていくことが大事な目標です。それが人間性の魅力というものをね、つくっていく方法論なんですよ。まあ、具体的にその人格の高さをつくるためにはどうするかとか、人格の深さをつくるためにはどうするとか、人格の大きさをつくるためにはどうするかということは、またこれも今まで何回も何回もそのことを申し上げてきましたけど、これもまた一個一個が、それぞれ３時間ずつの、内容を持った、非常にそのたくさんの内容を含んでますので、今それは申し上げられませんけど、またお話を聞いていただいてるあいだにそれは出てきます。実際、次回は「人格の高さをつくる」というテーマなんですよね。その次は「人格の深さをつくる」と。で、次回の次回の次回は「人格の大きさをつくる」という、そういうテーマでね、順番にその人格を磨くとはどういうことなのかということを、具体的にお話をしていくことになるんですけどね。人格というものには、高さ、深さ、大きさという、３つの魅力がある。**

**人格を磨くことによって人間性が成長していって、そして、人間性が人に魅力を感じさせるような、そういう内容を持ってる。その人間性が人に魅力を感じさせるということの具体的な内容というのは、人格の高さ、深さ、大きさという、そういう魅力が人間性を通して出てきたとき、人は感動するわけですよね。よく昔から、孤高の達人とか、高尚な趣味とかね、そういう高潔なる人物とかっていう、そういう高さというものが、人を感動させましたし、また『美味しんぼ』なんていう漫画を読んでても、深いとかってこう出てきたりなんかして、料理の鉄人が、なんか言ったときに、新聞記者の、なんとか君が、深いなとかって言って、そういう深さというものは、やっぱり長年、仕事をしてきた人間が、体験を通してつかむ世界がね、深さですので、やっぱり積み重ね、長年持続して積み重ねて努力していくことによってね、そういう深いというような、そういう味わいのある、言葉なり、生き方がこう出てきたりなんかして、人を感動させますよね。それから、人間の大きさというのは、この器が大きいとか、度量が大きいとか、包容力があるとか、統率力があるとか、それが人間の大きさというものの基準であって、そういうこの器が大きい、器の大きさはどうしたらできるのか、度量の大きさはどうしたらできるのか、包容力の大きさはどうしたらできるのか、統率力の大きさはどうしたらできるのか。そういう問題について考えていくと、この大きさを感じさせるね、まあ、そういう人間性が出てくるわけですよね。性格は個性ですから、これはもう変えようと思ったら病気になりますから、変えようと思ったらいかん。まぁ、性格は個性ですから、これはもうこんなもんやと思っても、性格は、自分が引き受けて生きていくしかない。**

**次は肉体的魅力ですね。肉体的魅力にも、やっぱり３つのこの具体的な内容があります。第１番目、容姿ですね、容姿。これは人間は命のかたちというものを持ってますので、かたちがある限りは、かたちの美しさを追求するということは非常に大事なですね、基本テーマです。だから、みんなこのエステに行ったり、ジムに行ったりなんかして、いろいろ体を鍛えちゃったりなんかして、その太り過ぎだとか、痩せ過ぎにならないように、どうして女の人は痩せたい、痩せたい、言うんやろうなと不思議なんですけど、必ずしも痩せることが美しくなることじゃないように思うんですが、痩せないと、店に売ってる服が入らないとか言ってですね、私の娘なんかでも痩せる努力をしてましたけど、あの服を買えるような体になりたいとかって、痩せちゃったりなんかして、なんか痩せ細って、病気になるぐらい痩せる努力をしたりなんかしてたり、なんかこう、あんまりあれはよくないなと思ったりなんかするんですけど。やっぱりこう、肉体の美しさの基準というのは人によって違うし、また時代によっても違いますので、あんまりそんな痩せ過ぎて、ファッションモデルみたいになんかもう棒みたいな足になってしまっちゃったりなんかしたら、かえって魅力ないですからね。やっぱり、ある程度、肉体の持ってるかたちの美しさというのは、やっぱりある程度、標準が、あると思いますので、やっぱりいろいろ考えないといけない。**

**だけど、一応、かたちがあるものは、そのかたちの美を追究するっちゅうこと。これは至上命題で、昔から、やっぱりクレオパトラの鼻がもうちょっと低かったら、歴史は変わっておっただろうと、言われるぐらい、女性のその美しさとかね、そういうこのかたちの麗しい姿というのは、やっぱりこう、男性を感動させて、歴史すら、そのことによって変わってしまうような、そういう話はよくありますよね。中国にも楊貴妃の話があったりなんかしてね。まあ、それぐらい、やっぱり、美というのはものすごく人を感動させますし、また人の心を動かし、また男性のさまざまな判断を、狂わせると言ったら、ちょっと悪い表現になりますけど、その女性の、やっぱりこう魅力によって、男性が、いろいろと判断を導かれるようなことが歴史的にはありました。これは、女性だけじゃなくて、男性もやっぱり、それなりにこのいろいろ外見を整える。髪型とか、ネクタイとか、服装とか、いろんな面でそういうこう外見的な美を追究するということ。これはもうどんなこの民族でも、また男女にかかわらず、それは放っておいても意識的に何かしらそういうことをするような、そういうこのものだと思います。**

**だけど、こう、今の時代は、ズボンにわざと穴を空けちゃったりなんかして、履いとったりですよ、なんか高校生だと、ズボンがずれ落ちちゃったような状態が、ファッションになってたりなんかして、だらしないような状態が一種のこうファッションとして、やられてますけど、あれもやっぱり、ルーズがきれいとかという言葉があるんですよね。ルーズがきれい。あんまりびしっとしてると格好悪いと。ルーズというのが、なんとなくこの美しいという、そういう美学があったりなんかして、そういうものの流れの中から、なんか薄汚いというか、なんかこうだぶだぶというか、なんかそういうところにゆとりが持ってる美しさとか、そういうものがあったり、どういう判断で、ああいう穴を空けるのか、判断に苦しむところもあったりなんかするんですけど、諸君も高校時代とかね、就職する以前にはそういう格好をしておられた方もいらっしゃるかもしれませんので、いっぺん聞いてみたいなと思うんですけど。でも、若者に聞いても、なんでそういう格好をしてるのと言っても、ちゃんと説明できないんですよね。だけど、あれがやっぱり、時代の流行というか、そういう一種の美の表現という、そういうかたちになって、あれもやっぱり、一種のかたち、ファッションですので、そういう時代的背景がある。**

**日本にはですね、その室町時代の末期に、婆娑羅という、そういうこの風俗があってですね、婆娑羅というのは、織田信長の若いころ、法被みたいなね、丈の短い浴衣みたいな、ものを着て、そのひもで、帯で縛るんじゃなくて、わざとわらで服を縛っちゃったりなんかして、それで、大人から見たら、格好悪いというか、だらしないというか、みっともないというか、そういう感じの服装をわざとして、そのことによって世の中の常識を覆して、古い伝統に縛られないで、新しい時代をつくるファッションとして、若者のあいだでものすごく流行したんですよ。それを婆娑羅というんですね。辞書で婆娑羅で引いていただいたら、室町時代末期のファッションで出てきますけどね。ちょうどあれと同じようなのが、今のあの若者たちの風俗というふうに、考えることができると思うんですけど、その意味では、今、ものすごく大きな倫理の混乱と同時に、そういう大きな文化的な曲がり角というか、まさに激動の時代で、その古いものが壊れて、新しいものが出てくるという、そういう状況の中で若者たちが、ああいう室町末期から戦国に入るという状況において出現したファッションと同じようなファッションを今の若者たちがしてるという、そういう状況もこうあるんじゃないかなと思って、そういう意味では、ますますこれからより激動という、この意外な出来事がどんどん起こってくるような状況がこれから出てくるのかもしれないなというようなことをね、思ったりなんかするんですけど。**

**かたちあるものは、そのかたちの美を追究するという、そういうあり方というか、命の働きがありますので、この容姿というものを整えるということも、これは非常に大事な魅力というもののつくり方である。だから、学生時代には変な格好をしておっても、みんな就職すればちゃんとびしっと決めて、働くという状況に皆、なってくるので、やっぱり社会において受け入れられるためには、そういう社会が、社会が求める、かたちというか、美しさというのが、ある程度あるわけですよね。これは人間も一個の自然物ですので、自然物である限りは、自分も一種の里景色というか、外から見れば景色なんですよね。だから、その人の目を、嫌な思いをさせるような格好をしたんでは、やっぱり申し訳がないというか、人の目に嫌な感じを与えないような、その美しい姿をするということは、社会的な、そういうこの意識からすると、当然の努力だというふうに、考えなければならない。人間といえども、里景色。人間も一種の里景色。人間も木や花と同じように、一個の自然物であって、その意味では、美しくなければならない。美しく咲かなければならないという、そういうこの使命というか、生き方が人間にも要求されます。そういう意味で、美を追究する、かたちの美を追求することも非常に大事な人間的努力としての目標になってくると。**

**それから、次は、目つき、表情、態度ですね。目に魅力がある、表情に魅力がある、態度に魅力がある。これも非常に大事な、やっぱり仕事をしていくうえでも、大事なこれは要素であって、人間関係の93％は、目つき、表情、態度で決まると言うんですよ。その人と話しておるとき、その人と付き合っておるときに、相手をどういう目で見るか。どういう表情で相手に対してるか。どういうこの態度で相手に接してるか。それがこのお客さんとの関係、取引先との関係、同僚との関係、上司との関係のすべてを決定すると。言葉というものが、人間関係を支配する割合は７％なんですね。これは10年ほど前にアメリカの若い心理学者たちが、初対面の人間関係がなんで決まると言うことを研究した結果、出てきたデータなんですけどね。その目つき、表情、態度、いわゆる言葉を超えたものによって、人間関係の93％は決まる。なんかあいつ、最近、俺に対してなんか態度、悪いなって。そういうのは、なんかその前に、自分が相手を、相手が嫌がるような目で見たとか、その前に何かしら、自分が相手と接してる場合の自分の目と表情、態度の中に相手が嫌がるものがあった。そこで、ああ、あいつは俺のこと、本当は嫌いなんやなとか、そういうことを感じちゃったりなんかして、急に態度が変わってくるというような、そういう場合がよくあるんですよね。**

**それから、また上司が、部下をこう見る場合でも、見下げるような、批判的な目で見ると、ああ、あの上司は俺のこと嫌いなんや。それでもう完全にその上司との人間関係は決まってしまうとかね。同僚との関係でも、なんかちょっとした、お互いが話しとるときに、その相手を見る目の中になんか相手の心を探るような目があったり、それだけでもう人間関係、壊れてしまうんですよ。本当、目は怖いですよ。目は口ほどにものを言いと申しますけど、口ほどどころの話じゃない。目は口以上なんですよ。目だけでもう、あらゆることは決まるぐらいの、力を持ってますよ。目ほど恐ろしいものはない。本当にね。目の中に表現される、目の表情というものが、ものすごく、関係を左右するんですよね。だから、みんなに不信の目で見られたら、もう生きていけなくなってしまう。その意味では、目だけで人を殺すこともできる。また目だけで人を生かすこともできる。そういう意味で、もっともっとわれわれは、目を鍛えるという努力を、セントバーナードなんですね。もっともっと目を鍛えないかん。**

**目を鍛えるっちゅうことは、目は心の窓と申しますけどね、やっぱり、その心を鍛えていかないと、目は成長しないですよね。で、心、意識を鍛えていかないと、態度も表情も磨かれていきませんのでね。目だけを磨くという、そういうことはできません。やっぱり、人間は有機体ですから、心を成長させ、意識を成長させることによって、相手を見る目が違ってくる。前々からお話をしてるように、人間にはどんな人間でも、長所半分、短所半分。どんな人でも、俺よりすごいところを半分は持ってるんだ。どんな人間の中にも必ず自分が嫌だなと思うところが半分あるんだ。それはなくならないんだ。人の短所は責めたらいかん。助けてあげんないかん。そういうふうな、人間についての意識というものが出てくると、だんだん人を見る目が違ってくるというか、その相手を見るときの態度なり、表情なり、目つきが違ってきて、だんだん人間関係はよくなっていくんですけど、そういう人間観というのはちゃんと定まってないと、自分の気分本位で、相手に接しますので、非常に人間関係は不安定で、人間関係に苦しむということになって、自分が結局は損をします。**

**どんなことでも、プラスにもマイナスにも解釈できる。どんなことでも、プラスにもマイナスにも解釈できるんだから、だから、どんなことでもプラスに解釈せな損やということで、その自分の身の回りに起こる出来事を全部、自分の人生のプラスになるように解釈していくという力を持ってくると、どんなことでも自分にプラスなんやと思うと、人を悪くは言わないという、そういうことになってきて、人を見る目が全然違ってきます。ばかと言われても、ありがとうなんていうようなことを言ってたら、全然もう、人間関係、違いますからね。ばかって、いちいちむかついとったんじゃ、ちっぽけな人間なんでね。ばかって言ったら、自分を叱ってくれたんやとかね、そういうふうにこう感じられるところが自分にあるんやなということで、勉強させてもらいましたとかね。まあ、そういうこう、自分が成長するためにそう言ってくれてるんやと思ったら、その相手に対して接するときの態度も違ってきますしね、表情も違ってきますし、また目つきも違ってきますよね。**

**『スクール･ウォーズ』というね、有名なドラマが昔ありました。あれは、実際には京都伏見工業のラグビー部の監督の山口良治という先生のドキュメントなんですけどね、そのNHKの『プロジェクトX』でも、取り上げられて、非常に話題になって、山口良治先生はいろんなところで今、講演をなさって、その感動を伝えてらっしゃいますけど、あの山口良治先生が、京都伏見工業という学校の廊下をバイクで学生が走ってたり、そういうめちゃめちゃな荒れ放題の学校だったんですよね。そこに体育教師として、日本ラグビー界の星といわれた、その山口良治先生が赴任して、その京都伏見工業を立て直す、そういうこの活動をするんですけど、その転機はどこだったのかといったら、そのラグビー部の監督になって、不良の学生たちを集めてラグビーを教えるんですけど、何を言ったって、全然、学生たちが言うことを聞かないし、怠け放題で、もうどうしようもない状況で試合をしたら、百三十何対ゼロで負けてしまうというような、そういう状況で、おまえら、悔しくないんか。同じ高校生やぞ。おまえら、ゼロかっと言って、で、みんな、並べって、今から喝を入れると言って、みんなを鉄拳で殴っていくんですよね。**

**殴られると、まあ、不良の学生ですから、何をというんで、むかついて、その殴った先生の顔をにらみつけて、かかっていこうとするんですけど、立ち上がった瞬間に、その先生の目に涙があった。その涙を見た瞬間に、最初、先生をにらんでおった目が、急に変わって、ありがとうございましたって、立ち上がってくるわけですよ。そこからラグビー部が全然、がらっとこう激変すると言うか、変わって、その不良の学生がまともになっていくというドラマが始まっていくんですけど、そのきっかけが、その学生を殴った先生の目に涙があった。そのことによって学生が、俺たちを憎くて殴ったんやないんやと。俺たちのことを本当に真剣に考えてくれて殴ってくれたんやと思ったから、殴られたときにはむかついて、かかっていこうという気持ちになったんだけど、ひょっと先生の顔を見た瞬間に涙があったと。そこで、その立ち上がってくるときに、殴られてぶっ倒れて、立ち上がってくるときに、ありがとうございました。と言った。そこからラグビー部は急変、激変してですね、素晴らしい、その劇的なドラマが始まるんですよね。そして、ついにわずか３年で、その京都伏見工業は花園で優勝する、日本一の高校ラグビー部になるんですよね。そういうドラマがあった。**

**これはやっぱり、目なんです、結局はね。どんなにひどいことを言っても、どんなにこの暴力を振るっても、目に愛があったら、人間関係は壊れないんですよね。それほどに目というのは、ものすごく大事な力を持っております。もっともっとわれわれは、目というものを大事に考えて、自分が人と接するときにどういう目で相手に接してるか。どういう表情で相手に接してるか。どういう態度でお客さんに接してるか。もっともっとそれを磨いて、洗練させていって、目と表情と態度が相手に感動を与えるという、それぐらいの力をつくっていかないと、自分を磨くということにはならないと思うんですよね。これもやっぱり、プロというふうに、言われる人間の修行の仕方だと思います。そうなれば、どんな人間関係でも素晴らしくなっていくし、また素晴らしい恋愛もできるだろうし、また家庭の中でも素晴らしい夫婦関係や親子関係をつくっていくこともできると思います。**

**多くの子どもたちが、小さいころ、お母さんに構ってもらいたいと思って、お母さんの足元にまとわり付いていったとき、お母さんが自分のことをじろっとにらんだ。その目の怖さが一生、トラウマになってですね、お母さんが好きになれんという、そういう心の傷を負ったまま成長していくという、そういうことも随分あるんですよね。ちょっとしたお母さんの目が、その子どもに取り返しのつかない、大きな心の傷をつくってしまう。本当に恐ろしいことですよ。まあ、これはお母さんだけじゃなくって、お父さんが子どもを見る目もそうでしょうけども、とにかく目の影響力というのは、ものすごく人間関係を絶対的に支配するぐらいのすごい力を持ってますよ。だから、感性論哲学では、いつも目に愛を忘れず、いつも目に愛の光をという、そういう言葉を時々、色紙に書いたりなんかするんですけど、本当に目には、どんな人を見る場合でも、どんなものに接する場合でも、いつも目には愛がなければならない。ぜひそんなことも、考えてみてもらいたいと思います。**

**最後は立ち居振る舞い。立ち居振る舞いって、これは行動の美学といって、人間は動物だ。人間は動く存在である。植物のようにじっとはしていない。動く存在である。だから、その動きの中に美しさがなければならない。動きをもって人を感動させるという力がなかったならば、動物としては非常に未熟だと。仕事をしてる姿とか、いろんな行動というその中に、何かしら美を感じさせる、感動を感じさせるという、そういうふうな文化というものをわれわれはつくっていかなきゃなりません。昔は女性の方がお嫁入りされるときに、行儀作法を見習えといって、いろんな行儀作法を習って、ふすまというか、障子を開けるのでも、いちいち座っちゃったりなんかして、両手でこうやって開けちゃったりなんかしてね。そういう何かしら無駄なようで、能率が悪いようでも、そこになんとなく美しさというのがあったわけですけど、今はもう能率本位ですから、立ったままぺっと片手で開けてしまったり、ものを持っとったら、足で蹴飛ばして開けてしまっちゃったりなんかしちゃったりなんかして、全然もう美しさというようなものは消えてしまって、能率ばかり、理性的な能率ばかりが大事にされるような状況になってきましたけども、やっぱり文化というものには、そういうこう何かしら理屈を超えた、美を感じさせる要因というものをやっぱり残しておかないと、その文化というものが持っておる心の潤いというものがなくなってしまうんですよね。**

**潤いというのは、間の文化と申しますけど、なんか無駄なような、その間というものが、潤いという、余裕というものをつくり出しますので、もっともっとそういうこの心のゆとりというものを、つくっていくような、ことも考えて仕事をする。あんまりちょこまか、ちょこまか、忙しく動いてるだけでは、そこには感動はありません。だけども、そのゆとりを持って、いろんなことをしてるという、そういうこの状況の中にその社風というものが持っておる美学というか、何かしらその会社の人間関係や仕事における潤いを人が感じて、感動する。あるいは、何かしらその会社というものの、品格みたいなものを感じるということになってきます。そういう意味で、もっともっと、われわれはこの自分の立ち居振る舞い、そういうものを磨いていって、そして、能率だけじゃない、何かしらそこに美しさというものを漂わせるような、そういうパフォーマンス、あるいは、仕事の仕方というものを考えていくことも非常に大事な要素だと思います。**

**今はコンピューターの時代ですけど、コンピューターの時代であればこそ、直接的な人間関係というものが、ものすごく切実に求められるという、時代になってくるんですよね。あまりにも機械との向き合い、向かい合いによって、心の潤いがなくなっていくという状況で、ますます人間関係の直接的な触れ合いというスキンシップがものすごくこう求められるというふうな、そういう心の渇望が生まれてきます。心が欲しいというのは、まさにそういうことの、表れなので、理屈じゃない、心が欲しい。心が欲しいということの中に人間関係の潤いというようなものが、含まれておるわけなんですよね。立ち居振る舞いという、行動の美学というね、動きの中に美しさを感じさせるというふうなこともテーマとして、やはり考えておかなければならない、重要な課題ではないかと思います。**

**よく外国からアーティストがやってくると、日本の芸能人のように、めちゃくちゃ、めちゃめちゃ動いて、パフォーマンスで、なんかこう感動させると言うんじゃなくって、外国のアーティストというのは、ちょっとした何気ない振る舞いの中にものすごい感動を呼び起こすような力があって、歌を歌いながら、手がすっと上がってきてですよ、すっと上がってきた手が、ちょっと動くだけでぞくっとしたりなんかして、風邪引いちゃったかなと思うような感じで、ぞくぞくっときたりなんかして、非常に感動したり、ただ立って歌を歌ってるんだけど、その歌を歌いながら、足がですね、足がというか、ちょっとかかとがすっと、ちょっと動くだけで、ぞくっとしたりなんかして、何気ないその動きの中ですごい感動を呼び起こすような、そういうふうな力があるんですよ。やっぱり、そういう動きというものがね、非常に人間はそういう感動というものをつくる力があるなということを、そういうことによっても感じるんですよ。**

**立ち居振る舞いの美学という、行動の美学、動物であるが故に、行動、動きの中に美を追究しなければならない。これもプロとしてのあり方というものが洗練されていった場合に大事な目標になってくるわけですよ。これは茶道なんかでもそうですし、華道なんかでもそうですし、いろいろこう、動作の流れがあるわけですけど、まぁ、茶道なんかでも、やっぱりさまざまなお手前のその流れが、非常に無駄のないというか、美しい、すっと流れるように進んでいって、その行動がその場全体に何かしら美学を感じさせるような、雰囲気を持ってきます。そういう意味では、会社の仕事の流れとか、あるいは現場で仕事をする場合でも、この非常に乱雑な、見苦しい状態ではなくって、何かしら、その仕事の流れの中に、立ち居振る舞いの中に、何かしらこう、お客さんに美しさを感じさせるような、動き方というか、そういうものがあると素晴らしいですよね。昔の職人というのは、そういう仕事の中に、周りにおる人を感動させるというふうな、美しさを感じさせるような、仕事というものを洗練された技として、つくっておった。刀鍛冶なんかでも、トンカチ、トンカチ、やってるという、そういうリズムが非常にその人を感動させるような、そういう状況をつくりました。そういう意味では、もっともっとわれわれは、そういうこう、仕事の仕方ということの中に感動を呼び起こすような、そういう力というものをつくっていく。それが、感動の職場とか、感動の職場づくりとかっていわれるような、そういうことにもつながってくると思うんですね。まあ、とにかくこれからは、日本人はいろんな仕事において、世界の見本となって、そして、その全世界の同業者に仕事における目標というものを、与えてあげるような、そういう意識でわれわれは自分たちの仕事の水準を高めていくという使命が、今、あります。全世界から何かしら目標として意識されるような、そういう水準というものをつくって、この世界の同業者に示していく、教えていく、そういうふうなこともね、これからの日本の職業人、プロとしては大事な役割になってくると思うんですよ。**

**ただ、仕事のうえの能力とか、そういうことだけじゃなくって、人間性においても、その仕事をしておる職業人において、世界から憧れられるような人間性というようなものを、つくっていかなければなりません。ぜひアサヒグローバルが、建築業界におけるですね、世界の最高水準の、そういうこの美学を仕事の仕方において示すことができる。まあ、そういうものを目標にして頑張ってもらいたいと。自分たちがこの業界において、仕事の水準における世界の頂点に立つんだ。世界の同業者は俺たちを目標にやってくるんだという仕事のレベルというものをぜひこの努力してつくっていってもらいたい。そうすれば、本当にこうアサヒグローバルという、この会社に自分が勤めておることが、本当にこう誇りになって、それだけで人から尊敬されるような、状況になってきます。**

**どんな会社も、最初はみんなちっぽけな会社で、名もない会社だったんだけど、その社員の方々の努力によって、一流企業になって、あの会社に勤めてるのかと言われるだけで、もうその人が評価されるような、そういう会社になってくる。それは、やっぱり、その社員の皆さん方の自覚と努力によってそういうことになってくるので、アサヒグローバルも、もうすでにそういう評価は県内においても、近隣においても、得ておる状況にありますけど、もっともっとアサヒグローバルで働いているということが、より大きな範囲から、それはすごいねと、それだけで言ってもらえるような、そういう会社にするのも、また今、社員として働いてる皆さん方の目標なんですよね。そういうふうにして、この自分の誇りもつくり、また、後輩のためにも、そういう道をつくってあげようという、まあ、そういう気分で、ぜひもっともっと、努力してですね、素晴らしい会社にしてもらいたいと思います。ということで、今日は人間的魅力とは何か。プロとして持たなければならない、人間としての誇り、魅力、人を感動させることができる要因とはなんなのか、そのことを話させてもらいました。どうもありがとうございました。**